

大正十年八月一日發行

大正十年七月四日印刷納本

修監 馬生島 村藤崎 232-B88

金の船

八月号



号八次・卷三

国立国会

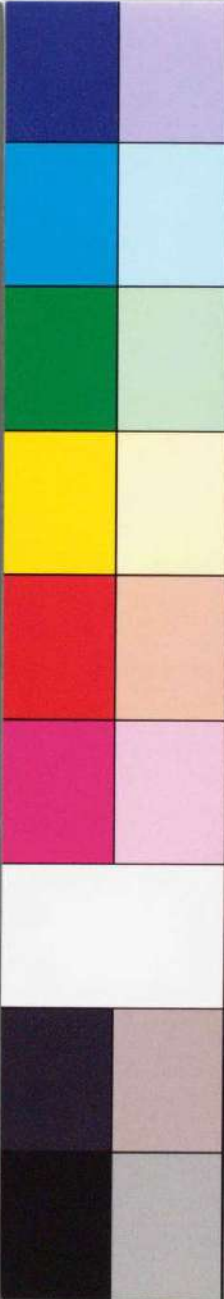
8. 3.

図書館

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak, 2007 TM Kodak

書叢作名詩情抒

現詩壇に於て名實共に嘖々たる諸先生の力作なり

(東京上野)



るけ於に季夏

トシメシツレフレの好絶

譜新し出賣月七

曲種	曲目	演奏者
歌舞伎劇	伽羅先代萩 (床下の場)	助高屋高助
マンドリン独奏	六春 (雨段)	長須賀三
佐原囃	矢車、猫じや、籠、おやまか	横須賀三
八木節	國定忠治 (尺八伴奏)	佐原大崎連
浪花節	賤機 (全段四枚)	尺八 正坊主
端唄	孝子迷の印籠 (二枚ツバ)	三芳村孝太郎
端唄	雪巴、森精根	天中軒雲月
新作唱歌	學校、近頃のしくじり、育と聲	東京唱歌會、三味線、松尾太夫
常盤津	積戀雪關原 (最初より貳枚)	三味線、松尾太夫

株式會社 日本蓄音器商會
販賣部 東京橋銀座一丁目
大阪東區南久寶寺町四丁目

りな店約特の社當もれ何は店器音蓄るあ用信

NIPPONOPHONE

常に新味に富める

鷺印レコード

月報目錄
無料送呈

書科教の味趣

このれんしふ帳を使ひますと、どんなに算術がきらいで
いやでたまらない子供でも、いつの間にか面白くなり
すきになり、算術の成績がよくなります。

面白く算術を覺えるやうにかいてある本

書科教定國
位本

先生も親達もよろこんです、める算術の本
小學校研究會主幹 若林文二先生著

小學校算術れんしふ帖

第一年用	定價五十錢	郵稅四錢
第二年用	定價五十錢	郵稅四錢
第三年用	定價七十錢	郵稅四錢
第四年用	定價七十錢	郵稅四錢
第五年用	定價八十錢	郵稅六錢
第六年用	定價八十錢	郵稅六錢

八〇四六三京東替振 社義正 込駒郷本京東
八九一三川石小話電 協社神士富

野口雨情氏 共編
霜田史光氏

本居長世氏作曲
加藤まさを氏装幀及挿畫

中版三百廿頁
表紙金箔函裝
美紙圓八拾錢
定價壹圓八錢
送料八錢

日本民謡名作集

忽ち再版

朝霧
後影を
見んとすれば
霧がなう
朝霧が……。

隠れたる驚く可き藝術出現す
愛誦してその味は限りなし
民謡詩人野口雨情霜田史光の兩氏が多年苦心の結果地謡により書籍により、古來の民謡數萬のうち嚴正なる藝術的批判の下に二百餘篇を選し、加ふるに上田敏、横瀬夜雨、北原白秋、島崎藤村、三木露風、西條八十、川柳柳虹、生田春月、野口雨情、白鳥省吾、霜田史光、藤森秀夫、竹久夢二等近代諸詩人の作を集めたるものにして、これこそ民衆藝術の精華なり。

民衆文藝社

東京市牛込區
五軒町一丁目
番地

電話番
東京替
番一〇六
番三〇五

廣田花崖先生著 「天地の巻」

少年科學小話

最新刊

この廣い天と地が、始めて出来た千萬年前の世の有り様はどんなことであつたでせう。又之から千萬年の後の世の有り様はどんなことになつて、一寸見當も付かない事を今の進歩した科學の上から推し量つて、かうもなるだらうと巧い想像をはたらいて、いかうの人物事件をまうけて、面白く書きこなし珍らしい物語、愉快に讀んで行くうちに、知らず識らず科學上の興味が湧いて發明創造の芽生えを培ふことの出来る近頃になり結構な本です。

四六版美本
二百四十頁
定價金壹圓參拾錢
送料金拾貳錢

東京女高堀七藏先生著

東京女高堀七藏先生著

少年理科物語

拾版
定價金壹圓
送料金八錢

理學士小林巴都子女史著

理學士小林巴都子女史著

理科なぜですか

五版
定價金壹圓
送料金八錢

岡本瓊二先生著

少年理科珍談

參版
定價金壹圓
送料金八錢

課外理科叢話

五版
定價金壹圓
送料金八錢

理學士小林巴都子女史著

理科私は水の一です

參版
定價金壹圓
送料金八錢

横尾眞琴先生著

趣味讀物實のある話

參版
定價金壹圓
送料金八錢

夏休みに読む本は
どんなのがいいですか？

發行所 東京市神田區小川町一四番地 敬文館 (電話三七七六)

金の船

第三卷 第八号

目次

水（表紙、石版刷）
櫛（表紙、石版刷）の木の下で（口繪、原色版）

雀の酒盛り（童話、曲譜）

夜の國（日本神話）

忍術のきゝめ（繪ばなし）

鏡國めぐり（長篇童話）

島の辨才天（童話）

毛替地藏と馬盗人（傳説童話）

身替り碁盤（童話）

言事をさく犬（ギンキ童話）

岡本歸一

本居長世
野口雨情

楠山正雄

岡本歸一

西條八十

沖野岩三郎

大塚大助

藤澤衛彦

鈴木善太郎

舟橋重一

夏の寢床（童話）

お別れの先生の話（童話）

鳥とふくろ（童話）

善い爺さんと悪い虎（童話）

落した銀貨（童話）

印度イソツブ物語（寓話）

禿が王様になつた話（童話）

五郎作と狐（童話）

七星てんとう蟲（童話）

野原の風（童話）

種（幼年詩）

夜の詩（幼年詩）

後の山六爺さん（附録）

奥内藤豊雄

奥高井宮

関大塚つね子

五加納治夫

西横山壽篤

楠山正雄

三齋藤佐次郎

三宅房子

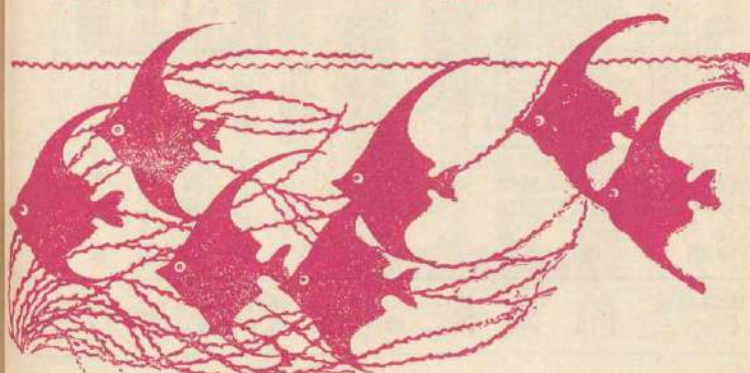
若山喜志子

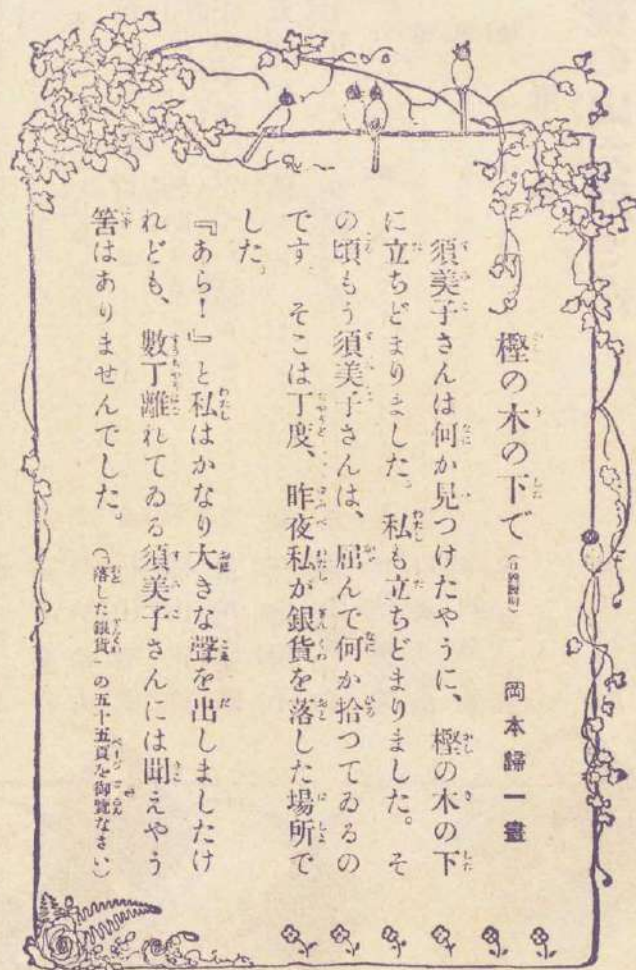
大野口雨情選

大山本鼎選

三若山牧水選

三編輯部選





櫨の木の下で

岡本歸一畫

須美子さんは何か見つけたやうに、櫨の木の下に立ちどまりました。私も立ちどまりました。その頃もう須美子さんは、屈んで何か拾つてゐるのです。そこは丁度、昨夜私が銀貨を落した場所でした。

『あら！』と私はかなり大きな聲を出しましたが、数丁離れてゐる須美子さんには聞えやう筈はありませんでした。

(落した銀貨の五十五圓を御覽なさい)



雀の酒盛り

本居長世作曲



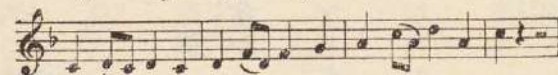
5 6 5 6 5 | 6 1 6 1 2 | 3 5 3 6 3 | 5 0 0 |

1. スズーメがユメーグラクテートサ
2. すずーめがさかーもりしてーたさ



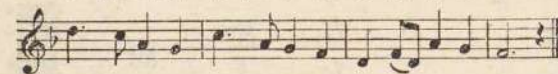
6 5 3 2 | 5 3 2 1 | 6 1 6 3 1 | 2 - 0 |

ナンノコッタナンノコッタミソーサザイ
なんのこたなんのこたみそーさざい



5 6 5 6 5 | 6 1 6 1 2 | 3 5 3 6 3 | 5 0 0 |

ハターケサホシモノホシタトサ
さかーだるたにーてのんーたさ

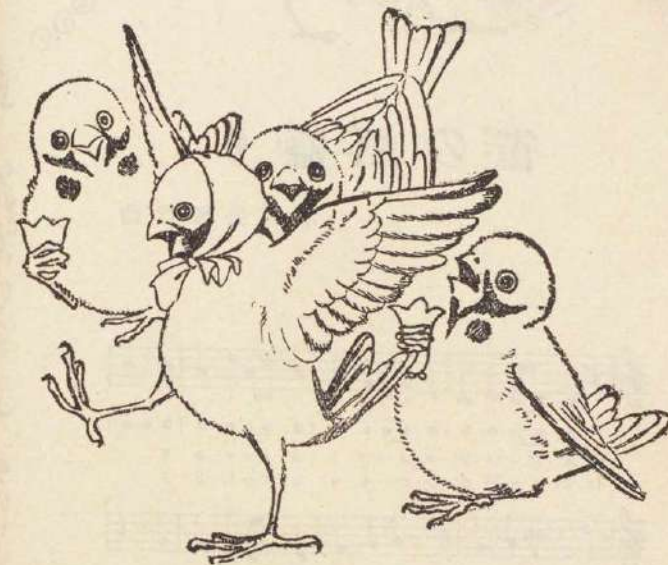


6 5 3 2 | 5 3 2 1 | 6 1 6 3 2 | 1 - 0 ||

ミタノカミタノカミソーサザイ
みたのかみたのかみそーさざい

雀の酒盛り

野口雨情



雀が 米倉 建てたとサ

なーんのこったなーんのこった

みそさざい

畑さ 干物 ほしたとサ

見たのか 見たのか

みそさざい

雀が 酒盛りしてたとサ

なーんのこったなーんのこった

みそさざい

酒樽 叩いて飲んだとサ

見たのか 見たのか

みそさざい



夜の國

(日本神話)
その六

楠山 正雄

一、蛇と百足

意地のわるいお兄さまたちに追はれて、ひいおぢいさまの素盞雄命のお出でになる夜の國へ逃てお行きたつた大國主命はそれからどうなつたでせう。夜の國といふのは、夜見の國とも、根の國とも、底の國ともいつて、人間の住む地の底にある國で、日もささず、月もてらさない、いつでも夜ばかりのくらしい國ですが、素盞雄命は、その王様になつて夜の大宮といふ御殿に、おむすめの須勢理比賣と一所に住んでお出でになりました。

大國主命は夜の國においてになつて、ひいおぢいさまの御殿をたづねていらつしやいました。須勢

理比賣は命の姿をお見付けになりますと、さもめづらしいものを見たといふやうに、あわてゝおとうさまの所に駆け込んでおいでになつて、

「お父さま、く、く、あちらに大へん美しい男の神さまがおいでになりました。」と申し上げました。

素盞雄命は外をのぞいてごらんになると、

「うん、葦原の色許男が来たか。」と仰しやいました。葦原の色許男といふのは、大國主命の子供の時のお名前です。

「まあ、では奥へお通し申しませうか。」

須勢理比賣がかういつて、おとうさまの顔をごらんになりますと、素盞雄命はどうお思ひになつたか急に氣むづかしい顔におなりになつて、

「内に通すには及ばない。今夜は蛇の室にとめておけ。」とないひになりました。

須勢理比賣は、せつかく遠方からたづねていらしたのに、お氣の毒だと思ひましたが、おとうさまのお言ひ付けですから、しかたなしに大國主命を

そのまゝ蛇の室へ御案内をいたしました。その時比賣は命に向つて、

「おとうさまのお言付ですから、今夜はこの蛇の室へお休みなさいまし。もし夜なかに蛇が出て来て、喰ひつかうとしましたら、このきれを三度ふつて、お休みなさいまし、蛇はすぐ逃げて行つてしまひますから。」と仰しやつて、蛇のひれといふ細い飾帶を頭から外して命におわたしなさいました。

案の定、夜なかにになると命のお休みになつてゐるまはりに、何百匹とない蛇がうよ／＼はい出して、氣味のわるい鎌首をもちやげて、命の手足にくひつきさうにしましたが、命が蛇のひれを三度振ると、みんなどこかへ消えて行つてしまひましたから、命は安心して、ぐつすりお休みになりました。

素盞雄命は大國主命はどうしたらうと思つていらつしやると、明くる朝平氣な顔をして、蛇の室から出ていらしたので、びつくりなさいました。そこで、その晩また須勢理比賣にお言付になつて、百

足と蜂の室へお泊
めになりましたが、
此度も命は比賣か
ら蜈蚣と蜂のひれ
を授かつて、これ
で百足と蜂を拂ひ
ましたから、安心
してお休みになる
ことができました。

二、鼠

素蓋雄命はますます

困つておしまひになりました。

た。そこで或日風の大へん吹く日に、

命をつれて廣い野原へ遊びにお出でになりました。

野原には一面草が高く茂つてゐました。素蓋雄命は

その時、弓を一ぱい引きしほつて、大きな鎗矢を一

本章の中へお射込みになりました。

「お前、草の中に入つて、あの矢をさがして来い。」大



を野火がもえながら通つて行きました。

火が通つて行つてしまつたので、命はまた地の

上に這ひ上りました。その時さつきの親鼠が、

「あなたのさがしていらつしやるのは、この矢でせ

う。」と言つて、なくなつた鎗矢を口にくわえてもつ

て來ました。しかし矢の羽のところは、子鼠たちが

みんなして喰ひかちつてしまつたと見えて、奇れい

になくなつてをりました。

さて須勢理比賣は、此度こそは大國主命も焼け

死んでおしまひになつたと思ひになり、涙を流し

ながら、をとうさまについて焼野へ出ておいでにな

りました。すると焼けた茅原の中から、大國主命

がやはり達者な體で、いつものやうにこゝしな

がら、

「はい、矢をとつてまゐりました。」と言つて、鼠の

くひかちつた鎗矢を素蓋雄命におわたし申しました

素蓋雄命はいよ／＼びつくりしておしまひになり

「お前は運のいい男だな。」と仰しやいました。

いつものやうに、はい／＼とおとなしく御返事をな
すつて、せいの立たないやうな茅がやの中をかき分
けて、中にお入りになりますと、その後で素蓋雄命
は四方から草に火をおつけになりました。何しろ風
のひどい日ですから、火は見る間にひろい野原の上
に一面にひろがつて、大國主命は火にとりかこま
れて、逃げ場がなくなつてしまひました。

今度はいよ／＼焼け死ぬのだと思つて、命は火の

中でぼんやり火をながめてお出でになりますと、足

もとに一匹の親鼠が、大勢の子鼠をつれて、ぞろぞ

ろと走つて來て、

「外はすぶ／＼すばまつて、内ははら／＼洞穴よ。」

と言ひました。

命はこれをお聞きになると、おや、これはどこか
に隠れる所があるのかなと思ひになつて、ふと足
の下の柔かい土をつよくお踏みになりますと、足が
すぶりと入つて、そのまゝ／＼と體が地の下の
洞穴へ入つてしまひました。ちやうどその時頭の上

三、掠の實と赤土

度々ためしてごらんになつて、素盞雄命も、この若ものはおとなしくつて正直な上になか／＼勇氣がある。それに何よりも運が備はつてゐる。今にえらなものになるぞと大國主命のことをお思ひになりました。しかしもう一度いぢめて試して見てやらうとお考へになつて、お宮へおかへりになると、大國主命をお寢間へお呼び入れになり、

「おれはひるねをするから、お前、そこでおれの頭の蟲をとつてくれ。」とお言付けになると、ごろりと横におなりになりました。

大國主命はお言付に従つて、ひいおぢいさまの頭をかきはじめますと、何百匹となく、百足がうよう頭の中から湧き出して、とつても／＼あとからあとから殖えて行ばかりなので、氣味はわるいし、どうしていいのか途方にくれてお出でになりました。

その時須勢理比賣が掠の實と赤土を持つておいでになつて、そつと命におわたしなさいました。命は



その時須勢理比賣が、おとうさまのお部屋から生太刀生弓矢といふ貴い太刀と弓矢と、それから天の詔琴といふ琴を持ち出してお出でになりましたから命は比賣を背中に背負つて、太刀と弓矢と琴を片手に持つて、どんどん逃げ出してお行きになると、運わるく御殿の門のそばの松の樹に、琴のさきを引つかけました。すると琴はからん／＼と大きな音を立てました。その音に素盞雄命はふいと目をおさましになり、いきなりはね起きようとなさいました。そ

掠の實と赤土を口の中に入れて、嚙んでははき出し、嚙んでははき出しました。素盞雄命は、寝ながらそれを御覧になつて、

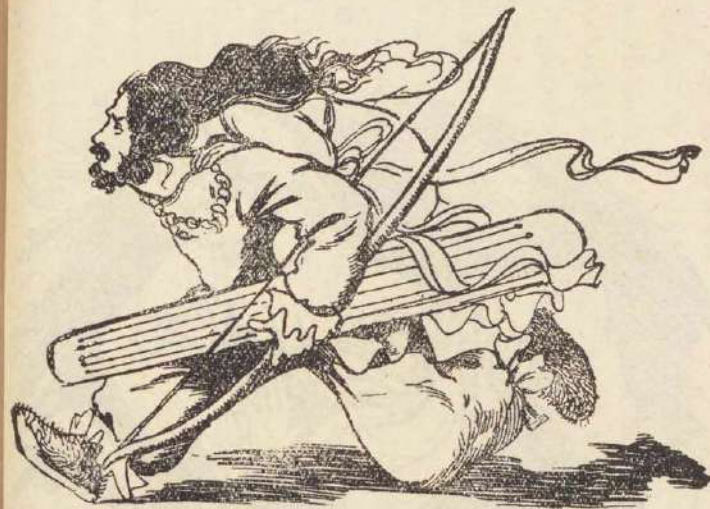
「百足を嚙んで吐き出してゐる。感心な奴だ。」とお思ひになりながら、うと／＼いゝ心持におやすみになりました。

その時須勢理比賣は大國主命の傍にそつと寄つておいでになり、

「さあ、この中に早くお逃げなさい。」と仰しやいました。

大國主命は、この時そつとねていらつしやる素盞雄命の長い髪の毛をおとさになつて御殿の柱に結びつけました。それから御殿の戸を堅くしめて、外から大きな石を持つて来て、お立てかけになりますと、まづこれで大丈夫だと思つて、ほつと一息なさいました。

その時須勢理比賣が、おとうさまのお部屋から生太刀生弓矢といふ貴い太刀と弓矢と、それから天の



の勢ひがあんまりはげしかつたものですから、はづみでお休みになつてゐた御殿の屋根ごと引つくりかへしておしまひになりました。命は構はず外へ出ようとする、重石がよせかけてあるので、疳癪をおこして、蹴破つて外へお出でになりますと、此度は、うしろから引張るものがありますから、怒つてうしろを御覧になると、長い髪の毛が柱に結びつけてありました。仕方がありませんから、一本々々髪の毛を解いてお出でになりますと、その間に大國主命と須勢理比賣はどん／＼逃げてお行きになりました。素盞雄命はやつと髪をほどいて、また追つかけてお出でになりましたが、命と比賣とはもうすつと遠くの方まで、逃げ延びて、むかし伊奘冊女神が、男神の伊奘諾命を追つてお出でになつた黄泉比良坂までおいでになりました。此坂を一つ越えると、夜の國からまたこの世界へ出られるのです。

素盞雄命は坂の下までいらつしやいますと、大きな聲で「大國主命をお呼びになりました。」

『待て、待て。言ふことがある。おれはお前をどうしようといふのではない。勇氣をためて見ただけだ。どうしてお前はえらいものになるぞ。その太刀と弓矢もお前にやる。國に歸つたなら意地のわるい兄の八十神どもを坂の下に追ひ落し、川の中に追ひ込んで、名前も大國主と名のつて、日本の國の王になるがよい。比賣は妻にやるから、仲よくくらしてくれ。いゝか。』と仰しやいました。

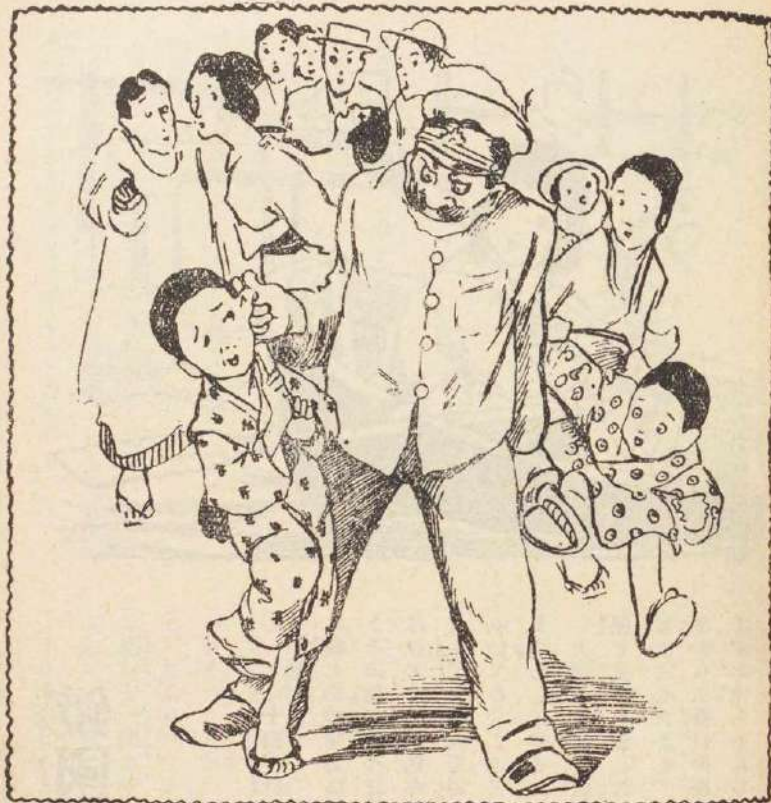
大國主命といふ名は、日本の王様といふ意味で、この時ひいおちいさまから頂いた名です。それまでは、葦原の色許男命だの、大己貴命だのといつておいでになつたのです。

さてその時大國主命は大そう喜んで素盞雄命にお別れを申し上げると、須勢理比賣をつれて、無事に雲の國へお歸りになりました。命がお歸りになると聞き、さつそくわるい八十神たちは大國主命を攻めに來ましたが、命は素盞雄命から頂いた太刀と弓矢の力で、八十神たちを一人残らず山の下へ追

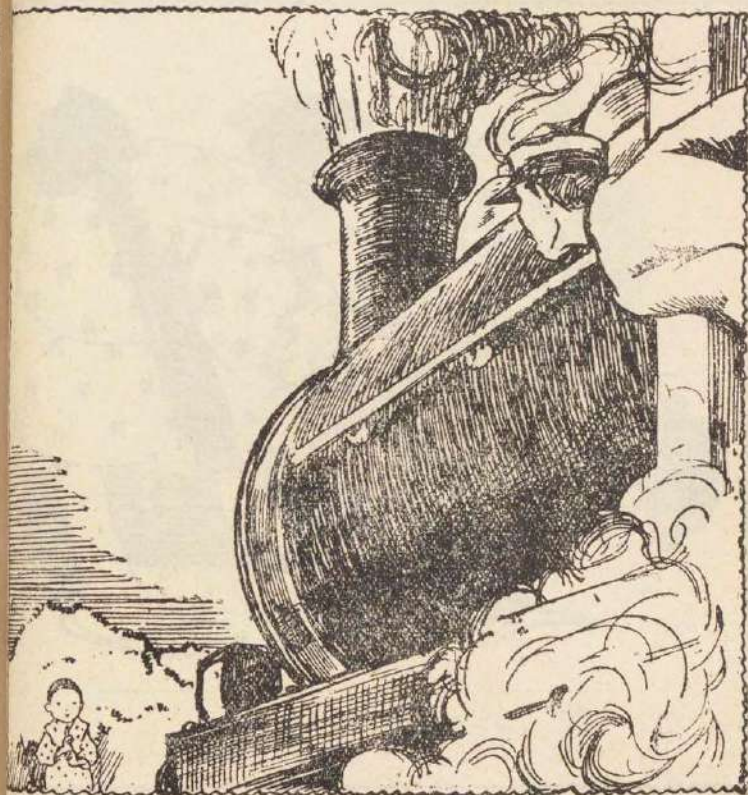
落し、川の中へ追ひ込んで、のこらず降参させておしまひになりました。それから須勢理比賣とお二人で、出雲の國の宇賀山といふ所に御殿をこしらへて、日本の國をお治めになりました。

因幡の國の八上比賣は、命が夜の國からおかへりになつたと聞いたので、命のお留守の間に生みしたお子を抱いて、はる／＼出雲の國までたづねて來ましたが、命にはもう須勢理比賣といふ立派なお妃ができてゐたのですから、

『さういふところへわたしのやうな賤しい女が上がつては畏れ多い。』と言つて、お子を御殿の門外の樹の股にのせて置いたまゝ、中へも入らず、しをくと國へ歸つてしまひました。樹の股に棄てて置いたお子は、家來たちが見つけて、命にお目にかけた。お妃の須勢理比賣が大へん可哀さうにお思ひになつて、自分のお子にしてお育てになりました。樹の股の神ともいひ、御井の神ともいつて、今でも井戸の神さまにまつるのは此お子のとです。(つゞく)



お巡查さんだつて僕の忍術で動けなくしてやらうと引つばられ乍ら、
「やッ」とやつたが、どうした事かこんどは一向きへめがありません。そのうち警察へつれてゆかれて、署長さんといふ恐いお目玉を頂戴しました。
「機關士が汽車を止めなかつたら、お前はひき殺されて居るぞ馬鹿ッ」と叱られました。そこへ姉さんが知らせたので、お父さんが来まして、皆にさんさんお目玉を頂戴しました。
皆さん、僕はなんと云ふ大馬鹿でせう。忍術なんぞが本統に使えるものだなんて考へたと思ふと恥かしいのです。決してこんな事するものではありません



三
實際僕は忍術が使へると思つたんです。それで向うから走つて来る汽車を見ると、汽車だつて止められない事はない、止めて見せると、線路の中央で「印」を結んだんです。
びい……と云ふ笛が聞えまして、僕が一生懸命目をつぶつて術を使つてゐました。
いつ迄たつても汽車が来ません。音もしないので目をあいて見ると、汽車は止つてゐる。そして大勢の人がわい／＼騒いでゐます。
そのうちお巡查さんが来て、僕を警察へ来いと引つばつて行きます。姉さんは泣いて逃げて歸りました。

鏡國めぐり (長篇童話)

西條 八十

十四、針 と 櫂



棚につてある品物をよく見ようとすれば、キツトその棚が空っぽになつてしまふので、あやちゃんはいどく焦れ込んできました。そこで、口惜しうに唇を噛んで考へてゐましたが、やがて、
『いゝわ。こんどは逃げ出したら何處までも追かけて困らしてやるから。』

とひとり言を云つて、今度は改めていちばん下の棚を見つめました。すると見るまにそこは空っぽになりましたから、あやちゃんは早速その次の、——下から二番目の棚を見つめました。さういふ風にして、あやちゃんは逃げる品物を隙間なく眼で追つて
『おまへさんはいつた子供かい？ それとも獨樂なのかい？ そんなにそこでグル／＼廻つてゐられると、わたしまで目がまはつてしまふよ。』
と、このとき、羊のお婆さんが聲をかけました。あやちゃんはその聲にふり返つて見て驚きました。羊のお婆さんは一べんに十四組の編針を使つてゐました。

『まあこのひと、どうしてこんなに澤山の針が使へるんでしょう？』

と、あやちゃんは眼をまるくして、
『知らない間にだん／＼針が殖えてくるやうよ。いまに豪猪見たいになつてしまふかも知れないわ。』と小さな聲でひとり言を云ひました。

『おまへさん舟が漕げるかい？』

と、だしぬけに羊のお婆さんがたづねました。そして編針を一組、あやちゃんに手わたしました。

『えゝ、少しは、——けれどこんな陸の上ではだめよ——それにこんな編針なんかではだめよ——』



たうとう天井まで追ひつめました。

『さあ今度は困つたらう！』

と、あやちゃんが得意に想ふ間もなく、品物は『そんなことには馴れてゐるよ。』と云つた風に平氣でスツと天井を潜つて行つてしまひました。

『おや！』

と、想つて、あやちゃんがまた新しく見なはすと、いま天井裏へぬけたばかりの品物が、もうすぐ傍の棚へ戻つて来てギッシリ詰まつてゐるのでした。

と、あやちゃんが返事しかけたとき、不思議や、手に持ったその編針は二本の櫂に變つて、自分は羊のお婆さんと一緒に小さなボートに乗つて、川の堤の間をながれてゐるのに氣がつかしました。

「あら！ あら！ あら！」

あやちゃんはびつくりしましたが、かうなつて見るととにかく一生けんめいに漕いでみるよりはか仕方がありますでした。

「しつかり！」

と、羊のお婆さんはどなつて、自分はどこからかまた一組の編針をとり出し、澄まして坐つたなり編物をしてゐました。

あやちゃんは、黙つてせつせと櫂をはたらかせましたけれど、妙に粘っこい鉛のやうな水で、櫂がくっついたなりどうしても上つて來ないことが度々ありました。

「しつかり！ しつかり！」

羊のお婆さんはめちやぐちやにかう歎鳴つて、後

から後から幾組も編針をとり出しました。さうして眼鏡のなから、デロリとあやちゃんの顔を見て、「もうぢきに蟹がつかまるよ。」と云ひました。

「蟹ですつて！ まあ可愛い！どこに居ますの？」

あやちゃんはさも嬉しさに訊きました。けれども羊のお婆さんは、もう今云つたことなんかけろり忘れてしまつたやうに、黙つて下を向いて相かはらず編物をしてゐました。

そのうちに舟は、青い蘭の繁みのなかに靜かに入つてゆきました。そこには氣持のいい微風がわたつてをり、そこらいちめん名も知れない水草のきれいな花が咲きみだれてゐました。

「まあきれいだこと！」

あやちゃんはおもはずかう叫んで、櫂の手をとめ右左の、手の届くかぎりのいろ／＼な花を夢中になつて摘みました。さうしてそれを小さな膝の上で、



楽しみさうにそろへはじめました。

『そのぶん綺麗な蟹をたくさんとつたね。』

と、羊のお婆さんが、やつぱり編物をしながらあやちやんに聲をかけました。

『あら、これ、蟹ぢやありませんのよ。花ですよ。』

と、あやちやんは羊のお婆さんの目のわるいのををかしく思ひながら返事しましたが、同時に、『さうさう蟹をとるのだつたつけ。』と、最前の話を想ひだしました。さうして、舷からしきりに暗い水底をのぞきながら、

『あたし小ぢやな蟹が欲しいんですけれど、この邊にはたくさん居ますの？』

と、訊きました。

『蟹でも何でもあるさ。』

と、羊のお婆さんは答へて、それから急に改つた聲で、

『さあもういゝかげんに極めておくれ。いつたい、おまへさんは何を買ふんだね？』

いだけサ。』

と、羊が云ひました。

『ではあたし』つだけ貰ひますわ。』

と、あやちやんは云つて、お金をお帳場の上へ置きました。そして心の中で、

『どうせこゝらの卵なんか、おいしい筈が無いから。』と、思ひました。

羊のお婆さんはお金をとつて箱の中へ藏ひましたそれから、

『わたしはこれまで品物をお客に手わたししたことがなんか無いんだよ。そんな真似をしてもむだだからおまへさん自分で取つて持つておいで。』

と云ひながら、店の奥の隅へ行つて、その棚の上に卵を真直に立てました。

『そんな真似をしてもむだだつて——いつたいどう云ふわけだらう？』

と、あやちやんは不思議におもひながら、椅子やテーブルを手さぐりして、なかへ入つてゆきました。

『買ふ？！』

と、あやちやんは半分はびつくり、半分はおびえた聲でかう鸚鵡がへしに云ひました。——なせと云ふのに、櫛も、ボートも、川も、何もかも、ちよいとの間に消えて無くなつてしまつて、自分たちはまたもとのうす暗い小さな店のなかに戻つてゐたからでした。

十五、卵 男

『あたし卵を買ひますわ。』

と、あやちやんは恐々返事して、

『それはお幾らですか？』

『二つ二十銭、二つで十銭。』

と、羊のお婆さんが答へました。

『まあ、二つの方が一つ買ふよりも安いのねえ。』

と、あやちやんはおどろいた聲で云つて、巾着を出しかけました。

『たゞ、二つ買つたら二つとも喰ふなけりやならな

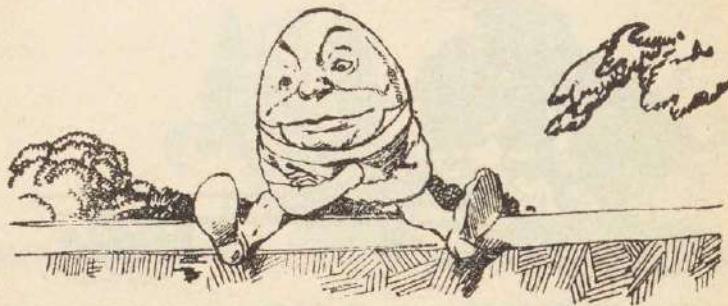
何しろこの店の奥の方はひどくまつくらでした。

『おや、あたしが行くと卵の方ですん／＼先へ行つてしまふやうだわ。はてな、これは椅子かしら？』

あら、樹の枝だわ！ まあ！ こんなところに樹があるなんてすかふん妙ねえ！ それからこゝには、たしかに小さな川があつてよ。まあ、こんな變な店つて今まで見たことがないわ！』

こんな風で、あやちやんが一足づゝ進めば進むほど奇妙なことだらけで、何もかもその傍までゆくと皆樹になつてしまふのでした。そこであやちやんはいづれあの卵もそばまで行つたら樹になつてしまふのだらうと観念してゐました。

ところがその反對に、卵はだん／＼大きくなり、だん／＼人間らしい恰好になつてきました。やがて



と、聲にだして云つて、兩手をひろげて受けとめる恰好をしました。どうもそれが今にもあふなく落つちて来さうにおもはれたからでした
 『これは怪しからん！拙者の事を卵など呼ぶのは！』
 急に頭のうへでその奇妙な卵男がどなりました。しかもあやちゃんの方はちつとも見ず、相繼らず外方を向いたなりでかうどなりました。
 『アラ、たゞ卵に似

てゐると云つただけよ。』
 と、あやちゃんは慌て、辯解して、それから、
 『卵にだつてするぶん標緻のいゝのがあるわ。』
 と、お世辭のつもりで付足しました。
 『どうも世の中には、赤ん坊同然一向理屈のわからん奴が多い。』
 と、卵男はやつぱり外方を向きながら威張つてかう云ひました。
 あやちゃんは今度は何と云つていゝかわかりませんでした。何しろ相手が外方ばかり向いてゐて、ちつとも自分の顔を見てくれないので、ひどく張合がぬけました。そこで傍の一本の樹に凭りかゝりながら、小さな聲で、でたらめにこんな唄をうたひました
 『卵男が堀のうへに坐つた、
 卵男がすつてんころり落つこつた、
 王様と馬と、王様の兵隊が、
 のこらず掛つてもちあげる、
 どつこい、なか／＼もちやがらぬ。』(つゝ)

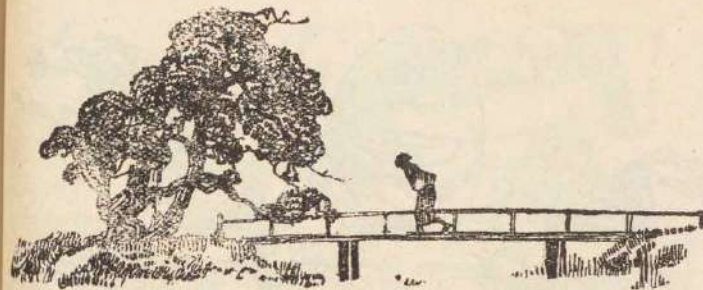


あやちゃんが二三尺離れたところまで来ると、それには眼も鼻も口もちやんとついてゐることがわかりました。
 その卵と人間との間の子のやうな男は、低い聲のでづべんで

あぐらをかいてゐました。その堀がまたむやみに狭いの、どうしてあゝうまく落つちらずに、釣合をとつてゐられるだらうと、あやちゃんはふしぎでたまりませんでした。けれども、いつまでさうやつて、ちつと見てゐても、その男は目ばかりきつせず、向の方を見たりでゐましたから、あやちゃんはテツキリこれは拵へものなんだらうと思ひました。そこで、
 『まあするぶんよく卵に似てゐるわね！』

島の辨才天

沖野岩三郎



或所に大きな古池があり、池の中に小さい島があつて、其所には辨才天を祭つた古い社がありました。毎朝、社の屋根で雀がチュウ／＼鳴き初める頃、欄干の朽ちた板橋を、とぼ／＼と渡つて島の辨才天へお詣りする一人の爺さんがありました。

五六町離れた所に住む番右衛門といふ爺さんで、大變なお金持でありました。爺さんのお家は百間四面の廣い／＼お屋敷で、お屋敷の周囲には、卵色に塗つた高い土塀が築かれてあつて、塀の中には、何百年たつたか知れない、大きな櫻の樹が五本ありました。で、町の人達は番右衛門爺さんのお屋敷を「櫻御殿」と申しました。夕方になつて、島の中の小さい杜の上を、時に歸る鳥が、カア／＼と喧しく鳴く頃、根太の朽ちて、ビヨ／＼と動く板橋を、とぼ／＼と渡つて、島の辨才天へ、お詣りする一人の婆アさんがありました。其の婆アさんは、番右衛門爺さんの奥様で、爺さんと婆アさんとは、かうして毎朝毎晩交る代る島の



辨才天へお詣りを續けてゐたのであり、もう櫻の花が散つて美しい／＼緑葉が、野にも山にも滴るやうに輝いてゐる時でした。番右衛門爺さんは、朝はやく家を出で、いつものやうに古池の所まで來ました。すると社の屋根では、お馴染みの雀が五六羽、「爺さん、お早う。」と言ふ代りに可愛い聲で、チュウ／＼と鳴きました。爺さんは右の手に杖をついて、左の手で朽ちた欄干に掴まり乍ら

とぼ／＼と板橋を渡つて、辨才天様のお社の前まで來ました。爺さんが、ボン／＼と柏手を拍つて、かなり大きな聲で、「南無辨才天様、どうぞ私のお願を、一日も早く、お聞届け下さいませやう……」と言ひ初めますと、今までチュウ／＼と、チュウ／＼と喧しく鳴つてゐた屋根の雀も、びたり！と黙つてしまつて、皆な小さい頭を傾けて、爺さんの言ふ事を聴くのでした。『辨才天様、私は最う今日で、恰度満三年かうして毎朝々々お詣りを致して居ります。けれども私のお金は、マダ五萬兩しかありません。どうぞ一日も早く、十萬兩になるやう、あなた様の御利益をお願い致します……』

爺さんは繰返し／＼こんな事を申してゐました。そして一番お終ひに、ボン／＼と柏手を拍つて立ち上らうとした時、不思議にも、お社の中から、『一寸お待ちなさい。』と、優しい細い聲で呼びかけ

ました。

番右衛門爺さんは吃驚して、暫く社の扉を見詰めておましたが、

「はい、何誰様でございますか？」と顔へ聲で申しました。

「私は此所の辨才天だ。」

「まア、あなたは辨才天様でございますか。して此の私に何か御用でも……」

「あなたは三年の間、毎朝々々私にお願ひをした、其のお願ひを聞垣けてあげよう。」

「えッ！ あの私のお願ひを？」

「さうです。あなたのお金を今夜の中に二倍にしてあげよう。」

「先ア、それではあの五萬兩を十萬兩にして下さいませんか。」

「宜いとも……、それからあなた



入つて、蒲團でも被つて隠れてゐなさい。」

「はい、畏りました、そして私のお家はどうして置けば宜いのでございませうか。」

「これから歸つて、皆なで一生懸命にお掃除をするのです。天井から床下から、隅から隅まで塵一つないやうに、綺麗に……お掃除をするのです。そして奥の一室に、あなたの五萬兩と、婆アさんの二萬五千兩とを、新しい容物に容れて積んで置くのです。」



の家の婆アさんも、三年の間私に、あなたと同じ事を願ひに來たが、それも聞垣けてあげる。」

「有難うございます。では家の婆アさんの二萬五千兩も五萬兩にして下さいませんか。」

「宜いとも……」

「それでは辨才天様、今晚の何時頃に、私と婆アさんとお金

が二倍になりませうか。」

「今晚の丑の刻（二時）に私が

あなたのお家へ行つてあげる。」

「は、左様でございますか、それは勿體ない事でございます。

では、どうしてお迎へ申せば宜

しいのでございませうか。」

「私は神様だから、人間が私を

見れば、直ぐ眼が潰れて見えな

くなります。だから今夜は宵の

うちから、皆な裏の土蔵の中に

「はい、畏りました。それだけで宜しうございませうか。」

「一夜の中に七萬五千兩が倍に

なるのだから、明日の朝、夜の

明けないうちから、近所隣りの

人達を五十人程招いて、御馳走

をせねばならない。それは今夜

のうちに、ちゃんと準備をして

置くのですよ。」

「はい、畏りました。もうそれ

だけで宜しうございませうか。」

「それで宜しい、それから念の爲に申して置くが、

私があなたのお家へ行く時は、俄かに大きな霰が降

る、それから大風が吹く。私のお伴が五十人ばかり

行くので、随分騒がしいが、土蔵の中から一寸でも

外を覗いたものは、直ぐ眼が見えなくなるから、あ

なたは其事を能く皆に言ひ聞かせて置きなさい。」

「有難うございました。何から何まで御親切様に仰



せ下さい
まして、
お禮の申
し様もご
さいませ
ん。」
番右衛
門爺さん
は顔を土
に擦りつ
けて何度
も何度も
叩頭をし
て、急い
でお家へ
歸つて行
きました
それから

二八
婆アさんを奥の室によんで、お社で辨才天様から
聞いた事を皆なお話し致しました。

婆アさんはそれを聞いて、腰を抜かす程喜まし
た。さア大變だといふので、俄かに下男下女を指圖
して、廣い／＼家中を天井から床下まで一生懸命に
お掃除をさせました。

爺さんも箒を持つてお庭を掃く、婆アさんも雑巾
をもつて、お縁側を拭くといふ騒ぎ、お晝御飯も食
べないで、日の暮々までかゝつて、やつとお掃除が
出来ました。

皆なへト／＼に疲れてしまひました。女中さんら、
もう疲れてしまつて、御飯を炊く勇氣が無いので、
爺さんは杖に縋り乍ら、三町程離れた所にある料理
屋へ行つて、お料理を六十人前注文して來ました。

其のお料理が着いたのは、巳の刻(十時)でした。
家内十人が、お腹をペコ／＼にして待つてゐた所
へ、御馳走が届いたので、皆な舌鼓を打つてそれを
食べました。そして爺さんの命令通り、裏の土藏倉

の中へ入つて、其所で前後も知らず、ぐう／＼寝て
しまひました。

番右衛門爺さんと婆アさんとは、七萬五千兩のお
金を、新しい箱に容れて、奥の室へ積んで置しま
した。

それから五十人前のお料理を次の室へ、すらりと
並べて置きました。

「さア、明日の朝は十五萬兩の大金持ちになるんだ
ぞ。」

爺さんは、婆アさんの耳の所へ口を寄せてかう言
ひました。婆アさんは黙つて、大きく點頭いてにこ
にこしました。

それから爺さんと婆アさんとは、裏の土藏へ行つ
て、辨才天様のお出でを今か／＼と耳を澄して聞い
てゐました。

すると恰度丑の刻と思はれる頃、バラ／＼バラバ
ラと大きな霞が降り出しました。庭樹がザツ／＼と
鳴り初めました。雨戸がゴト／＼ゴトと音を立て初

めました。

「いよ／＼辨才天様が、お出になつた。

爺さんのかう言つて、手を合せて一生懸命に、

「南無辨才天様、どうぞ私のお金だけを五倍にして
倍にして下さいませやう。」

と祈りました。

すると婆アさんも負けぬ氣になつて、

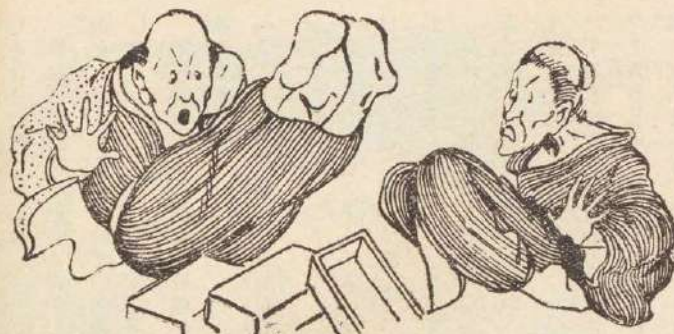
「南無辨才天様、どうぞ私のお金だけを五倍にして
下さいませやう。」

と拜みました。

二人は汗をボト／＼流しながら、頻りに拜んでゐ
ましたが、やがて霞の音も止み、風も吹き止みまし
た。

早く夜が明ければ宜いと思つて、爺さん婆アさ
んは窓の隙間から射し込む明りを待つてゐました。

雀がチユウ／＼鳴きました。鳥がカー／＼鳴きま
した。窓の外から薄すらと夜明の光りが射し込んで
來たので、番右衛門爺さんは土藏の戸を引あけて轉



ぶやうに外へ駆け出しました。婆アさんも續いて走り出しました。そして周章で奥座敷へ飛込んで見ましたが、まア！何といふ事でせう。十五萬兩になつてゐる筈のお金は影も形も見えませんでした。次の室を見ますと、五十人前のお料理は何一つ残らず食べてしまつて、お腕やお皿が座敷中に散ばつてゐました。『助けて呉れ……泥棒……』

と爺さんは頓狂な聲で狂人のやうに叫びました。土蔵に寝て居た八人の下女下男は、其聲に驚かされて飛び出して來ました。見ると庭一面に小石が散ばつてゐました。庭の大きな櫻の枝も、滅茶々に折られてゐました。『霞だと思つたら、小石が降つたのだッた。』と一人の女中が言ひますと、『大風だと思つたのは、櫻の枝を揺りやがつたんだなア。』と年寄の下男は言ひました。爺さん婆アさんは、餘りの事に、呆氣に取られて三日三晩物が言へないで黙つてゐましたが、四日目の朝になつて、爺さんは、やツと口が利けて、『私は慾が深過ぎた！』と申しました。『本當にネ、私もさう思ひます。』と婆アさんも申しました。(なはり)

えんさかほい

(推薦童話)

大塚 大助

えんさかほい

坂道ほい

車は重いぞ

えんさかほい

上りはほい

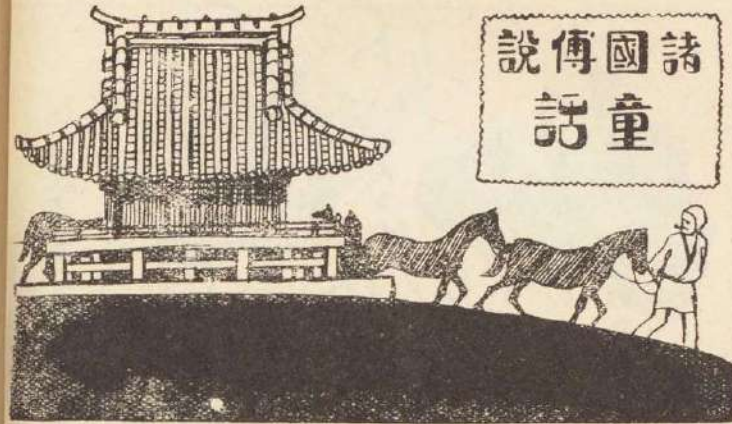
上りはほい

後押し たのむぞ

えんさかほい



諸國傳説
童話



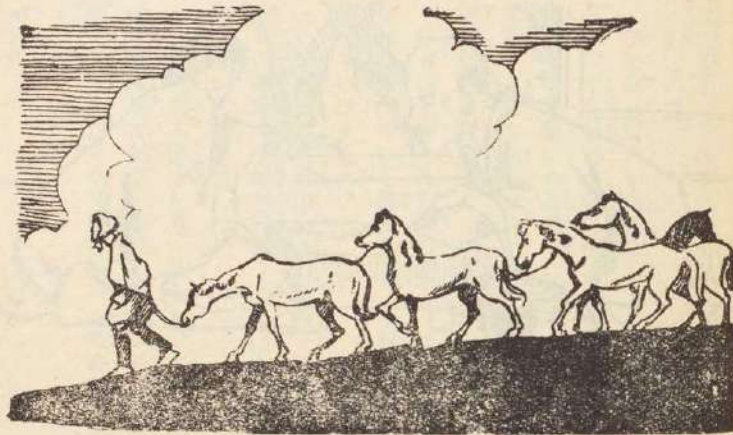
毛替地藏と馬盗人の話

藤澤衛彦

三三

昔々、まだ太閤様が、日本國中を統
一されませんでした戦國時代に、變兵
童子といふ、音に名高い馬盗人がなり
ました。
或時、尾張國の東の城主と、西の城
主とが仲違へをしてお互ひに明日は戦
争をするつもりでなりました宵の間に
どつちの城でも、用意の馬が一匹残ら
ず見えなくなつたといふ不思議にでく
しました。これは大變と大騒ぎで、
諸所方々を尋ねましたが、神隠しにで
も通つたか、天狗にでも捕まへられて
行つたか、何百何十匹かの馬は影も姿
も見えないといふので、どつちの城で
も、明日の合戦が心もとなくなり、お
互ひに軍使を立て、「明日の合戦暫く
中止」を敵方に申し立てる事になりま

した。東の城の軍使と、西の城の軍使とが、
お互ひに、どう談判をされたものかと思案し
い／＼やつて來ました。お互ひはばつた
り出逢ひまして、出あひがしらに思はず「明
日の合戦は止めにせう」と挨拶しました。は
つと氣がついて提燈の印を見ますと、敵同士
でしたので、「あは、は、は」とお互ひはわ
ざとらしい笑ひをした後、「それではきましま
したな」とお互ひに禮をして歸らうとします
と、上の方で「あは、は、は、は、それでき
まりました」と真似る奴があります。びく
つとして見上げますと、變兵童子が、澤山の
馬を連れて、山の頂上に立つてなりました。
こんな具合で變兵童子の爲に暗い目に合つ
て合戦の出来なくなつたお話はいくつも傳へ
られてありますが、變兵童子の捕へられたと
いふお話は聞く事があるませんでした。



これもやはり其頃有名な二人の盜賊
が、どうして、あうまく澤山の馬を
盗みながら知れずにあるのだらうと怪
んで、相談の上、變兵童子の配下に便
はれて窺つてなりましたところ、變兵
童子は、何處で盗んだ馬でも、きつと
一遍は、愛知の島田村に連れて來ます
そして、其處の古藏山の地藏堂の前を
通る時に、「白いの」とか「黒いの」と
か聲をかけます。すると、不思議や、
赤馬が白馬と化り、石がけ馬が黒馬と
化ります。なるほど、これでは變兵童
子の惡事のあらはれる筈がないと、す
つかり其やり口を知りました例の二人
の盜賊は、其日から獨立して、お互ひ
に馬盗人を稼ぐ事になりました。
『それではお互ひ、幸福に暮さうよ』
と、二人は一かどの名人になつたつも
りで、西と東に別れて行きましたが、
西へ行つた盜人は甲の村で、東へ行つ
た盜人は乙の村で、同じやうに馬を七

西づつ盗んで、島田村に落ちのびました。
西の奴の盗んだのは皆白い馬、東の奴の盗
んだのは皆黒い馬でしたが、お互ひは、古藏
山地藏寺の御堂の前を通る時、地藏様を
かけて、西の奴は、
『黒いの』
と言ひ、東の奴は、
『白いの』
と言つて通り過ぎました。それで、東の奴の
は皆白馬と化り、西の奴のは皆黒馬に化つて
しまひました。
二人の盜人は、これで先づ／＼大安心と、
平氣で、その七匹の馬を連れて、西の奴は乙
の村へ、東の奴は甲の村へ入り込みました。
ちやうど其時は、甲の村でも、乙の村でも
馬を盗まれたので大騒ぎとなつたところ
でしたので、二人の馬盗人の馬を見ますと、
どつちの村でも、自分達の盗まれた馬だと思
ひましたので、
『此馬盗人ッ』と言つて、直に二人を捕へて
しまひました。(尾張の話)

身替り碁盤

鈴木善太郎

三四



「お花や、一寸出かけてくるから留守をたのむよ。」
お父さんの角之進はいまし何處かへ出かけようとして、門口でちやうど張り物をしてゐたお花に聲をかけました。
「お父さん、また伊勢屋さんへ行らつしやるんですか。」
お花はお父さんのうしろ姿を見おくりながらいひました。角之進は返事もせずに、すた／＼と伊勢屋のはうへいそいで行つてしまひました。
お父さんはまた碁を打ちにゆくのか知らしとお花は思ひました。お父さんが近ごろ毎日々々伊勢屋に入りびたつて、その主人の利兵衛と碁を圍んでゐる熱心さといふものは、お花にはをかしい位でした。然しお母さんには死なれ、又殿様の不首尾のために浪人となつてゐる今のお父さんの身を思ふと、あゝして此頃の淋しさを打ち消すより外はないかも知れないと思へました。それにしても罷りすぎた結果、今に何かとんだ間違ひでも起

らなければいゝがと、小さな娘心をいためました。

二

伊勢屋は質屋を商賣にしてゐる界限切つての物持ちで、下谷練堀小路の伊勢利といへば随分遠い田舎までも鳴り響いた長者でした。主人の利兵衛は今日も朝から碁の相手の角之進を待つてゐた處とて、早速藏前の座敷に通して、碁合戦をはじめました。

「昨日は私かとんだ敗けをとりました。今日こそあなたに勝ちたいと思ひます。」と利兵衛は碁石を打ちながらいひました。

「いや私もあなたのためには散々苦戦をしました。今日は是非お手柔かに願ひます。」と角之進も碁石を取りながら笑ひました。

二人は忽ち夢中になりました。二人の頭の中にはどうかして相手に勝たうといふ考きり何もありませんでした。そこへ伊勢屋の一番番頭の徳太郎が入つて來ました。

「旦那！」

「や、ひどい處へ打ち込まれましたな。」

「旦那！」

「ハテ、何とか其手を防ぐ方法はないものかな。」

「旦那！」

徳太郎は夢中になつてゐる主人の利兵衛を幾度か呼びかけました。利兵衛は漸く其聲が耳に入つて返事をしました。

「何だ、喧しい！」

そしてやはり碁盤から眼を放さずにゐました。

「三河町の鹿島屋さんから、たゞいま五十兩届きましたか……」

徳太郎はそこへ五十兩の紙幣束をだしました。しかし利兵衛は相變らず見むきもしませんでした。

「旦那、金の事ですから、どうかすぐおしまひ下さい。」といつて徳太郎は又店の方へ歸つてゆきました。

三

勝負は利兵衛の勝ときまつて、燈火のつく頃角之進は自分の家へ歸つて行きました。

三五

『徳太郎、三河町の鹿島屋さんから、金はまだ届かなかったか。』といって利兵衛は店に出て来ました。徳太郎は聞くより驚きました。

『旦那、先程私が持つて参つたではありませんか。』

『ハテナ……』

『だから私は申上げたのです、金の事だからどうかおしまひ下さい……』

二人は藏前の座敷まで来て見ましたが、先刻の五

十兩は

影も形

も見え

ません

そこで

徳太郎

はいひ

ました。

『何し

か此處



三六
にはあなたと角之進様きりお出でがなかったのですから……どんな固い人でも金を見るとつひ心の變り易いものですから……』

『お前は角之進様がお取りになつたとしてもいふのか。いや、あの方に限つて……』

と、利兵衛は云つて見ましたが、徳太郎が確かに置いていった金がない以上、もしかしたらといふ疑も起つて来て、兎に角一應徳太郎を角之進の家へやる事にいたしました。

四

角之進の娘のお花は、今か／＼と歸りを待つてゐた處へ、漸くお父さんが歸つて来ました。お花は何事もなくつたことを心の中で喜んで、いつものやうにお父さんと二人でさびしいお夕飯をたべながら、

『お父さん、此頃のやうに暮に夢中になつては、もしか間違でもあるといけません。あまり凝らないやうにしてくださいませんか。』とお花はお父さんを諫めました。

な事をしないのだが……』と角之進は涙聲でいひました。

お花はお父さんの心の中が考へられました。そしてそれ切り黙つてしまひました。

『御免下さい。伊勢屋から出ましてございますが……』とそこへ徳太郎がやつて来ました。

『先刻は甚だ御厄介になりました。時に何か急な御用でもありましたか。』と角之進は徳太郎を上にあげていひました。

徳太郎の話は意外でした。先刻の金の事を知らぬかといつて、まるで泥棒呼ばはりをしました。角之進は腹を立ててしまひました。

『ではあなたは其五十兩を私を持ち歸つたと云ふのですね。私はそんな恥かしい事を云はれて黙つてはゐられません。さアもう一度いつて御覧なさい。』

角之進は側にあつた刀をヒラリと抜きました。今にも徳太郎の首がコロリと落ちさうでした。お花は見るよりびつくりしてお父さんを止めました。そし

『いや、これが博奕をするの、酒を飲むのといふのではない。お前の母でも生きてゐれば、おれはこん



て無理矢理その刀を取つてしまひました。

『よろしうございます、斬るなら斬つて貰ひませう。主人はあなたを奉行所に訴へるでせうから。』と徳太郎は恐ろしがらずにいひました。

『なに、そんなら其金を返したら何も文句はないのでせう……二三日中に返します。』

角之進は暫らく考へてからいひました。

『ではお待ちしてゐます。』といつて徳太郎は歸つてゆきました。

五

『お父さん、あなたは其金を知つてゐるんですか？』

『お花はいきなり泣き出しました。』

『いや、おれは勿論知らない。然し疑ひのかゝつたといふだけでも恥かしい事だ。おれは表向きにしたくないので謝つてやつたのだ。然し、おれは五十兩の金は出来ない！』
角之進はさういふより早く刀を取つて腹を切らう

『確かに頂戴いたしました』

と利兵衛はいひました。すると角之進は又かういひました。

『言いつて置きますが、無くなつた五十兩の金かもしれないが出たら、その時はあなた方二人の首を貰ひますがようございますか。』



『勿論お上げします。』

『私も私の首をお上げします。』

としました。お花は驚いてお父さんにすがりました。
『お父さん、どうか吉原へ私の身を賣つて下さい。そして五十兩の金を作つて伊勢屋へ歸して下さい。神様は屹度正しい私達を救つて下さるでせう。』
お花はさういつてまた泣きました。お父さんも泣きました。

六

お花は泣き／＼お父さんと別れて、吉原へ身を賣つて了ひました。お花が孝行の一心でこしらへてくれた五十兩は、吉原から角之進の家に届きました。『神様は正しい私達を救つて下さるとお花はいつた。ほんとうだらうか。』
といつて角之進は泣きました。

七

角之進はその金を伊勢屋へ持つて行きました。『約束の五十兩を持つて來ました。どうか受取つて下さい。』
角之進は五十兩の金を差し出しました。

利兵衛と徳太郎が答へました。

八

するうちに年の暮になつて、伊勢屋では煤拂ひをしました。

『旦那様、旦那様！』

と徳太郎は顔色をかへて利兵衛のゐる處へ飛んで來ました。

『今藏前の座敷の額を外しましたら、五十兩の金落ちて來ました。あの時の金は角之進様が盗みなすつたのではありません。どうしたらいいでせう。』

徳太郎が差し出した紙幣束は確かに三河町の鹿島屋の封印がついてゐました。

利兵衛はあの日徳太郎が置いていつた金を夢中で懐に入れて碁を打つてゐる中に、便所に立つ時又夢中で額のかげに置いて行つたのを、それなり忘れてゐたのでした。

利兵衛は今其事を思ひ出しました。

『私が悪かつたのだ！』

利兵衛は青くなつて了ひました。その時伊勢屋の前を通りかゝつた虚無僧がありました。虚無僧はいきなり家の中に飛び込んで、編笠を取りました。見ればそれは角之進でした。

『さア約束です。あなた方二人の首を貰ひませう！』

角之進は刀に手を掛けて嘯鳴りました。利兵衛と徳太郎は其前に首をならべました。

『何とも申譯ございません。さア御存分に願ひます』

『どうぞ私の首もお取り下さいまし。』

角之進は刀を抜きました。

『よい覺悟だ。二人とも一打にしてくれるぞ！』

角之進は刀を振り上げて斬り下ろしました。バタリといふ音がしました。何かボンと飛びました。

二人の首ではありません。碁盤の角が飛んだのです。利兵衛と徳太郎は不思議な心持で、今角之進に割られた碁盤を見つめました。

『約束通り首を渡さうとするお前達は正直者だから許してやる。』と角之進はいひました。然し、あれか

ら私は家にも居られなくなつて虚無僧となつた。私は方々の國々を歩いて難儀して來た。これといふのも皆碁盤の爲めだ。碁盤の罪は許せないから切つたのだ。』利兵衛も徳太郎も喜びました。

『何とお禮を申しませう。』

『全くお禮の申し上げようがありません。』

二人は角之進を拜みました。

『お禮をいふなら娘のお花にいつて下さい。私はあの時口惜しかつたので腹を切らうとしました。すると娘が私をとめて、吉原に身を賣つてあの五十兩の金を作ってくれたのです。』と角之進はいひました。

二人は始めてお花の事を知つて驚きました。利兵衛はすぐに吉原へお花を迎ひに行きました。

九

お花が吉原から伊勢屋に連れて來られて見ますと虚無僧姿のお父さんがそこにゐました。

『お父さん、神様は私達を救つて下さいましたね。』

お花はさういつてお父さんにすがりついて、嬉し

泣きに泣きました。

『さうだ、お前のつた通りだ』
角之進も泣いて喜びました。

十

伊勢屋ではどうして角之進やお花にお詫びしたらいかと、其事を考へました。そして利兵衛は、子供が無かつたのを幸ひ孝行娘のお花を自分の養女にしたいと申しこみました。角之進も、異存はないと答へました。

角之進は殿様から急に呼ばれました。行つて見ると、殿様の御氣嫌が直つて、元の土になる事が出來たのです。丁度其日、お花は伊勢屋の相續人にきまつた徳太郎と、目出度い結婚の式を挙げました。(なほり)



犬くさきとこふ云くよ

船橋重一作



まいにち まいにち げいとうをしこまれて
すこしでもわすれたり まちがへると なぐられ
たり ごはんをたべさしてくれないので こんな
にやせてゐます。



もぐりこみ

2

はやく
なになぐつ
してゐるのだ。

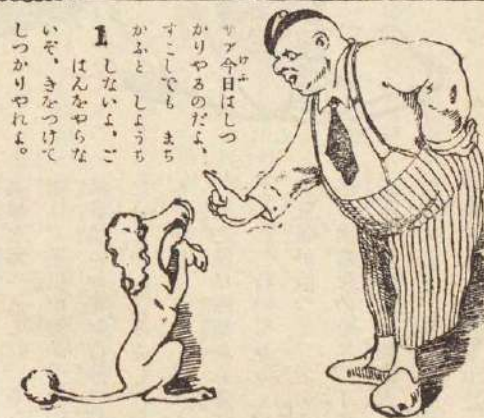


4

またもぐりこむやつがあるか、にげだしたな、いたいぞ、
あんなにをしへても、まだおぼえないのか、ばかやろう。



犬「ごめんな
さい
おや
これでおひる
ごはんはだめ
かな おなか
は、へた



サア今日はしつ
かりやるのだよ、
すこしでも まち
かふと しょうち
1 しないよ、ご
はんをやらな
いぞ、きをつけて
しつかりやれよ。



出て来い
とびのれ

3

しつかり
やれ

なにをかんがへ
てゐる、ばか
さつさと
やらないか。



5

こんどは
あたまだ
うんさうだ
うまい
さうだ
けふは これくら
ゐで、かんべんし
てやるとしよう。

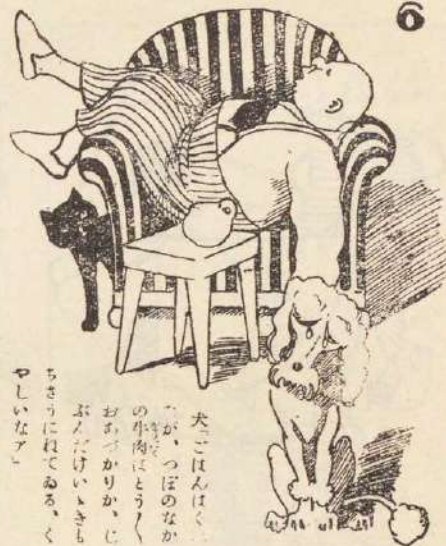


犬「やれ
たすかつた、
ごはんくれる
かな

鍋三

四二

6



犬ごほんはく
「が、つぼのなか
の牛肉はどう
おあづかりか、じ
ぶんにけいもきも
ちさうにねてゐる、く
やしいなア」

8

そら テーブルの下へ入つ
た、もぐればやく。



9

にがすものか



四四

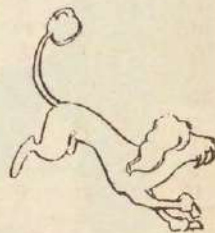
おれでさ
へあんな
にげいと
うしても
もらへない
肉をとつて
ゆくなんで
どうするか
おぼえて
あろ

10



ひやア ほら
あたまだ、くら
ひつけ。

おつと
しよちだ



11



がすいはく「だつてあたまだ
くらひつけと云つたらやないか」

いたい
ばか それはおれの
あたまだ、こんちく
しよ いたい。

そら
上だ
とび
のれ。



夏の寢床

内藤豊雄

冬は夜なかにおこされて、
黄色いあかりで着物着る。
夏はそれとはあべこべで、
晝間のうちから寝かされる。
寢床の中からそつと見れば、

小鳥はまだ木に跳んで居る。
通りを歩く大人達の、
足音がまだきこえてる。

空は青々晴れてるし、
遊びたくつてならぬのに、
晝から寝なけりやならぬとは、
あんまりひどくはあるまいか。

(ステイブンソン)



お別れの先生の話 (應募佳作)

高井宮

私の通ふ学校は、東京でも山の手といふ目白の高臺にあつて、前にはあの氣持のよい早稲田の森を見、後は廣々とした戸山ノ原を眺めて何ともいへない程清々した所です。そして毎日教へて戴く先生は川合先生と申してお生れになつたお國が秋田だけに時々變なお言葉でお話なさることがあります。けれどもお話がお好きだからでもありませんがそれはそれはお手で、その上ほんとに御親切で情深いお方で、私共のめんどうを、なにくれとなくよく見て下さいます。

でいたゞきます。授業が終つてお家へ歸る時間が來ても、先生とお別れするのが何となくいやで、いつまでもお話でもしてゐたい様な感じがいたします。先生も私共が歸るのを御覽になつて、御自分の御子さんにもお別れるやうに、懐しさうに、いつまでも私たちの後姿を見送つていらつしやいます。

こんなに懐しい、大好きな、そしてお優しい先生がこの三月の末、證書授與式のすんだ二十四日に「お家の都合でどうしてもお國へ歸らなければならぬ」といふので、学校をおやめになることになりました。

私は此のお話を聞いた時、それはほんとかしら、嘘であつてくれればいいと思ひ、思はず涙をこぼしました。

先生は私どもに向ひお別れの言葉にと次のやうなお話をして下さいました。私は先生のお口からお話を聞くのは、これがおしまひかと思ふと、どうしても泣かすにはゐられませんでした。先生のお話といふのは次のやうなお話でした。

『不思議なこともあればあるもので、私が三月の二十日に、いよく國へ歸る事にきまつて、二十二日に引越をするために、家中の道具を片づけてしまつて、もうこれでみんな始末がついたと安心して、行李やら風呂敷包やらを眺めてゐると押し入れの隅の方でも、哀れな聲でヒソ／＼泣いてゐるものがありました。私は不思議に思つてその聲のする方をちよつと覗いて見ましたが、別に何も居る様子もありません。然し聲はだん／＼大きくなつてきましたから、どうしたところかとよく／＼見ると隅の方に残された一枚の古新聞紙がホロ／＼涙をこぼして泣いてゐるではありませんか。私は驚いて其の古新聞紙に向つて』

「一たいお前はどうしたのだ。何がそんなに悲しいのだ」と訊ねました。



鳥とふくろふ (少年自)

東京市麻布尋常小学校

大塚つね子

昔あるお宮の森に、親孝行な鳥がすんでゐました。そのじぶんの鳥は、白い色の羽をしてゐました。

ある時、親や自分のたべる餌を取りに行きました。すると、ふくろふがたいへんじやまをして、充分餌をひるへません。その次の日も、その次の日も何れをひるひに行くと、ふくろふがじやまをするのでした。そこで鳥はこまつてしまひ、そのお宮の神様に、

「神様は鳥をひるひに付く時、ふくろふがじやまをしませんやうにして下さい」とたのみました。すると神様がその願ひをもつととおぼしめして、

『よし／＼ふくろふがそんなわるいことをするのなら、うん／＼しかつてやらう。』と申されて、さつ／＼ふくろふをおよび出しになりました。

そこで神様はふくろふに、

『さあまはけしからんやつだ。せつ／＼孝行な鳥が、餌をひらふのにじやまをする、そのばつに、さあまの眼は、晝は見えないやうにしてやらう。』とおつしやいました。それから今度は鳥に、

『おまへはもう晝は、ふくろふにじやまをさせないやうになつたが、夜はお前の白い羽が目立つて、ふくろふにしろとわるいから、お前の羽は黒くしてやらう。』とおつしやいました。

それで今でも、ふくろふは晝目が見えず、鳥は今でも、羽が黒いといふおぼなしであります。(をばり)

さうするとその新聞紙は涙を拭き／＼

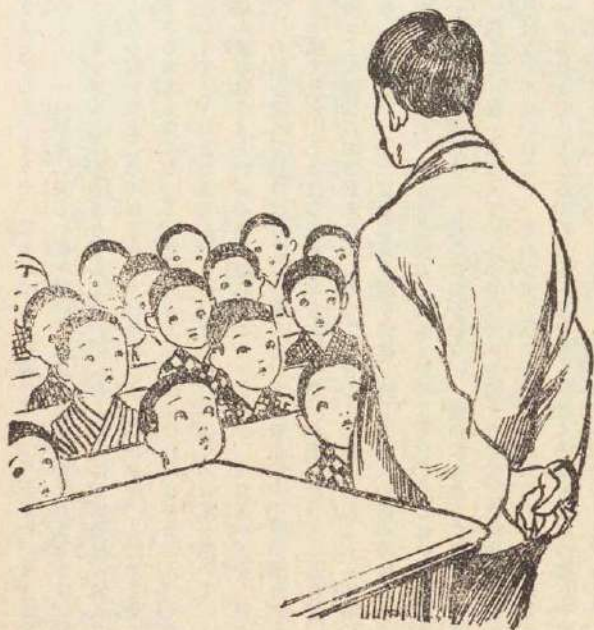
「私は一昨年の十二月こへ参りました。今年で丁度足かけ三年になります。私は此處へ参りますと直ぐ、何か一つ爲めになることをして、先生に永い間置いていた。御恩返しをしやう／＼と思つてゐましたが、つひその機がありませんで、今日までかうしてをりました。ところが、先生が只今お國へお歸りになりましたのに、私をこの儘こへ残しておいでになるのかと思ふと、悲しくて聴かしい事も忘れて泣いてしまひました。先生、私もどうか行李の隅へでも入れてお國へつれて行つて下さい。さうして下さい。私もいつか一度先生のお辨當の包紙になつて、ほんの御恩返しでもしませうから、どうか連れて行つて下さい」と泣きながら頼みますから、私も感心して、

「お前は立派な心を持つてゐる。まことに偉い。連れて行くとも連れて行くとも」といつて直ぐ行李の端へ入れてやつたら、今度は嬉し泣きに泣きました。それから、もうこれでよいだらうと、いよく車に荷物を載せると、又裏の方で悲しい聲をしほりたてゝ泣いてゐる者があります。

私は前よりも一層驚いて行つて見ると、何處にもそれらしい者は見あたりません。ハテおかしいと思つて、よく／＼氣を附けて見ると、小さな植木鉢の中から聞えて来るではありませんか。

「たいどうしたのだらうと鉢の中をかきまわして見ると、真黒い身體をした小さい者が、自分よりも大きな涙を出して、しきりに泣いてゐますから、私は「お前は、たい何だ。何といふ名だ。どうしてそんなに泣いてゐるのだ。」と聞きましたら、その黒い小さな者は、

「私は花菱の種子です。私はかうして先生のお手から此の鉢に播かれ、毎日水を掛けて戴いたり、日向へ出して貰つたりして、たいそう可愛がつていた。くものですから、この夏にはどうかして人一倍立派な花を開いて、先生の厚い御恩の少しでも、お返ししやうと思つてをりましたのに、先生は今日お國へお歸りになつ



善いお爺さんと惡い虎の話 (少年白)

神戸市筒井尋常小學校 加納 治夫

昔々、あるところに大層怖い深いお爺さんが住んで居りました。或暖い日に、そのお爺さんが町を散歩して居りますと、向ふの方で虎が「なり」に入られて大變怒んで居りました。お爺さんはかばいそうに思つて居りますと、虎が「なり」の中から出して下さいと頼みましたので、お爺さんは虎を出してやりますと、虎はその恩を忘れて、牙をむいてお爺さんに飛びかかり、食べて了はうとしました。お爺さんは驚いて、虎に少の間お頼みしたい事があるから待て下さいと言ひましたので、虎は食べる事をやめて、お爺さんの言ふ事を聞きました。お爺さんは、虎を「お」から助けたのに虎がお爺さんを食べる方が善いかどうかを道で出會ふ五人のものに尋ねようと頼みましたので、虎はこれを承知して、お爺さんと虎は一しよに町を歩いて森の方へ行きました。森一に虎が待つたのは、一本の大きな木が

の水でありました。そこで、お爺さんは「かし」の木に向つて言ひました。「かし」さん私が親切にこの虎を「なり」から出してやつて、悲しんで居る虎を救つてあげたのに虎が私を食べやうと言ひましたが、どちらの方が善いでせうか、と言ひました。「かし」の木は少しの間考へた後で言ひました。それは、虎さん、そのお爺さんを食べてしまひなさい、と言ひました。そこで、お爺さんは驚いてそのわけを聞きますと、「かし」の木が言ひました。

私は毎日この處に立つて居て、夏の暑い日には私の大きな身體で大きな涼しい影をこしらへて旅人を休ませてあげ、雨の降る日には私が傘のかばりになつて人を救つてあげるのに、人はその恩を忘れて私の身體を折つて薪木にして燃してしまひます。それですから人は恩知らずです。虎さんその惡い人を食べてしまひなさい、と言ひました。お爺さんは大變悲しんで、第二番目のものに會はないかと思つて、又虎と一しよにすん／＼行きました。二三町行きますと、牛がやつて來ましたので、お爺さんはその牛に前と同じ事を尋ねました。牛は一すうなづいた後、虎さんそのお爺さんを食べてしまひなさい

てしまふとのこと、どうぞ、私もいつしよに連れて行つて下さい。そうすれば私も安心して、一生懸命に美しい花を開いてお目にかけることが出来ますから。それをこのまゝかうして置きざりにしておいでになられては、折角ほん氣になつて綺麗な花を開いたところで誰も見てくれる者が無いばかりか、これから後お世話して下さるお方もなくなつて、私は死んでしまはなければなりません。それを思ふと悲しくて／＼たまりません」といひました。私はその言葉を聞いて、

「お前の恩を返さうといふ心は、誠に感心ではあるが、まだ考へが少し足りない私が今、お前を連れて行けば行けない事もないが、若し途中で根が離れたら、お前はその後で死んでしまはなければならぬ。が、此處にかうしてゐれば、私が出た後すぐ又親切なお方がおいでになつて、きつとお前を以前よりも大事にして下さるに相違ない。また立派な花を開くのは、決して他人の爲めではない。皆自分のためになるのだ。私が花を見ないからといって、世の中にはいくらも人がある。その多くの人達がきつと見るにちがひない。褒めたり喜んだりするに決つてゐる。決して、私一人なんていふ小さな考へを持たないで、世の中の多くの人の爲を思はなくしてはいけない。それが世の爲にもなり、人のためにも親のためにも先生への御恩返しにもなるのであるから、どうか泣くのはもうきつぱりやめてこれから先は身體を丈夫にして、この夏には立派な花を開いてくれ、それが私の心からのお頼みでもあるから」と申しましたら、花葵は涙を拭いてニコ／＼し乍ら「どうもありがたうございます。私の考へは間違つてゐました。先生がおいでにならなければ、御恩返しは出来ないものとばかり思つてゐましたが、たゞ今のお前様でよく耐へられました。これから先は、又／＼おいでになるお方のいふことを

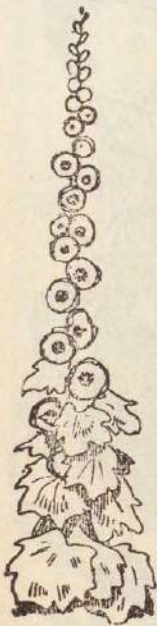
くきいて、身體を丈夫にして、暑い夏の日にも弱らず、大きい立派な花を開いて皆さんにお目にかける、先生のお心を安心させ、引いては世の爲、人の爲に盡しませう」といひましたから、私は「きつとそうして呉れ」と幾度も／＼頼んで、「それではこれでお別れをする。夏の休みにはお前の美しい花を見るから」といつて別れました。

どうです皆さん、この花葵といひ、先の新聞紙といひ、まことに見あげた心だてではありませんか。

花葵や新聞紙はともあれ人間は誰もかういふ立派な心掛を持ちたいものです。不思議なお話といふのはこれで終りました。どうか皆さんも今までより一層身體を達者にして、一心に勉強して下さい。私は遠く離れても、こればかりを楽しみにしてゐますから。……お別れの言葉にかへて一言申しました。」

とおつしやつて壇をお下りになりました。

その時は校長先生をはじめ、外の先生方も、生徒も、涙を拭かない者はありませんでした。今でもその時の有様を思出し、毎日先生の事を忘れたことはありません。(なはり)



いい、私等は年が年中、朝から晩まで人の爲めに働いて、私等が少し年を取ると、人は私を殺して食べてしまひます。そんな思ひをする人は食べてしまひなさい。と言ひました。第三番目にお爺さんと虎は、空を飛で居る鷲に奪られました。處が驚も、私は人に害をせずには空高く獨りで飛で居りましたのに、人は私を鐵砲で撃たり、又一番私の大切な子供の居る巢をついて子供を持つて行きます。そんな悪い人は食べてしまふ様にしなさい、と言ひました。そこで、虎はお爺さんを食べようとしたが、お爺さんは虎に頼みやつと許してもらつて、第四番目のものに會ひに行きました。

第四番目には「リス」に會ひましたが「リス」も又前の者と同じ様に食ふべ様に言ひましたので、お爺さんは益々悲しんで、もう生きた心地もなく、最後の者に出食ふ爲に、虎と一緒にとぼとぼ、坂を下つて行きました。すると、向ふの方から「リス」がおどりながらやつて來ました。お爺さんは「リス」に向ひ、前と同じ事を尋ねました。

「リス」は小さな頭を傾けて少の問考へた後、お爺さんに向つて言ました。お爺さんもう一度話を聞かせて下さい、私は一向お爺さんの言ひ事に少しも聞きません、と言ひました。

お爺さんは、又虎の通りの事を言ひました。「リス」は又頭を傾けた後、此虎は虎に向ひ言ひました。虎さん一體お爺さんの言ひなかりで何です。虎さんには「なり」と言ひななりのか少しもわかりません、と言ひました。

虎は大層さうさうな顔をして「なり」は箱の大きな様なもので、その一方の方に鐵の格子が、いくつもついて居る大變強いものだと言ひました。これを聞いた「リス」は、私は一度その「なり」が見たいものです。そしてその「なり」と言ふものに入つて居る様子を見、どの様にして虎さんがその「なり」から出たかを見せてもらつた上で、どちらが善いかな言ひませうと言ひました。馬鹿な虎は前に來た道を共に返り「なり」の中に入りました。

「リス」は益々おちついて言ひました。虎さんそれでこの「なり」の鏡がどの様にしてあつたか、一度見せていただきます、と言ひながらその鏡をびんとかけてしまひました。そして「リス」は言ひました。

虎さん、さあ勝手に出てお爺さんを食へなさいと言ひながら、善いお爺さんと一しよに町の方へよるこんで歸つて行きました。馬鹿な悪い虎は「なり」の中で、大變おちついて獨りじだんだん睡んでおこりました。(なはり)



落した銀貨

横山 壽篤

「妾が小さい時のことで、今に忘れられないことが一つ御座います」と云つて、とし枝さんが私に話したことを書きます。

一

「あゝ、須美子さんよ。」と妾は思ふす云ひました。そして今須美子さんが通つてゐる天神山の御道こそ、妾が昨夕銀貨を落した場所なのです。

「あの櫟の木の下あたりだつた。」と思つた時です。須美子さんは、何か見つけたやうに、その櫟の木の下に立ちどまりました。妾も立ちどまりました。

その時も須美子さんは、屈んで何か拾つてゐるのです。「あら！」と妾は可成り大きな聲を出しましたが、数丁離れてゐる須美子さんに聞えやう筈はありません。

「まあ、随分だ、妾の落したものを……」妾の囁は猶疑に燃えてゐました。須美子さんの手の動きやうを、少しも見のがすまいと一心にみつめました。須美子さんは、掌に拾ひ集めたものを、大切に持つて立ちました。懐を探つて、紙を出しました。その紙へ掌のものを移して、丁寧に包みました。離れてゐるとは云ふものゝ、妾が注意して見まらつてゐることも知らずに、須美子さんは、學校に向いて歩き出しました。

須美子さんは、それは可愛らしい少女でした。顔たちが可

五四

妾は子供の時、それは癪坊でした。お母さまに起されても起されても、生返事ばかりしてゐて、仲々起きませんでした。ですから學校も始終時間におくれて、先生にお目玉を度々頂戴いたしました。

ある朝のこと、寢坊の妾が、何日になく早起きをしました。そして朝の御飯を急いで食べて、學校のお荷物を小脇に、家を出ました。と云ふのは昨夕、兄さんと二人で、町へ買物に行つての歸りに、石につまづいて轉んで、銀貨を五六枚、暗闇の中へ落したのです。お錢を落したと云つては、お父様に叱られるので今朝誰も通らない内に早く見つけ様と思つたからなのです。道は乾いて白くなつてゐましたけれど、兩側の草の葉にはみんな美しい露の玉が光つてゐました。涼しい風が髪のをなぶります。ほんとに夏の朝は好い氣持のものです。まだ早いから、誰もまだ學校に行くものはないと思つてゐましたら、道が数丁先の方を、誰だか一人、もう學校へ行つてゐるのです。

愛らしいばかりか、學科の成績は級で一等でした。その上お行儀がよかつたので模範生だつたのです。妾達は、それを羨みました。そしてねたみました。

妾はもう自分の落した銀貨の惜しさを忘れてゐました。模範生の須美子さんが、今斯う云ふ行ひを目の前でしてゐるのを見て、鬼の首でも取つたやうな氣がしました。妾は足許も見ずに、須美子さんの後姿を見つめて歩いてゐました。須美子さんは又立ちどまりました。妾も同じく立ちどまりました。

須美子さんは、道の片端に下りて泥を掘りはじめました。掘つた穴の中に、紙包みを押しました。上から土を掛けて、足で履きました。妾は勝利を得たやうに、冷かな笑ひが浮ぶのを覺えました。

二

妾が學校に着いた時には、須美子さんばかりではなく、もう十数人のお友達が來てゐました。須美子さん達は鬼ごっこをしてゐましたけれども、妾はどうしても、其氣になれませんでした。

五五

妾の目先には、今見、来た生々した乾かぬ土がちらつきました。須美子さんが紙包みを埋めて、土を掛けて、その上を履んだ、その草履の跡のついてゐる土が、はつきり見えました。一反は、掘り返して紙包みを取り出さうと思ひましたが



矢張り、つとしておきました。
『模範生も、もう僅かの時間の間だ。』と思ふと同時に、妾は職員室と云ふ札の掛つてゐる扉の前に立つてゐました。
『先生！』妾はあわたくしく職員室に駆け込みました。お早う御座いますを云ふのさへ、忘れてしまふ位、それほど妾は狼狽てゐました。

職員室にはまだお二人きりでした。妾達の受持の藤井先生と一年生の受持の森下先生だけでした。お二人とも、優しい女の方でしたから妾は幾分無遠慮でした。

『どうかなさいましたか？』と先づ藤井先生が聞いて下さいました。

妾は無暗と泣きたくなつて来ました。ともすると、やるせなさ胸の底からこみ上げて来るのを、ちつと耐へてゐました。昨夕躓いて銀貨を落したことから、それを須美子さんが拾つて、隠してゐらつしやることを、取りとめもなく訴へました。先生は腑に落ちないので、何度も訊き返されました。自分自身でさへ、何故斯うも程よく語せないのかと怪しましました。この時妾の胸は恐ろしくくる動悸がしてゐました。

藤井先生の美しいお顔は曇りました。先生は須美子さんを最良にしてゐらつしやいました。暫くは何とも仰いませんでしたが、聴て

『あなたの今、仰つたことは、間違ひはないでせうね。つまり、あなたの落された銀貨を、あの方がお拾ひになつて、隠してゐらつしやると、斯う云ふのですね。』と念を押されました。

『はい、妾、たしかに見てゐたのです。』と妾は、妾の得意の算術の答へを云ふよりも、もつとくはつきり云ひました。

間もなく須美子さんが、先生に呼ばれて這入つて来ました。須美子さんはいつもの通り可愛い顔をしてゐました。先生は須美子さんの方に椅子を少し進めて、斯う仰いました。

『この方がね、天神山の細道で、昨夕お金を失くされたのですつて、それをね、もしや、あなたがお拾ひになつたのぢやあるまいかと云ふことなのですが……つまり、あなたは何日もお早く學校に入らつしやいますから。』と大層云ひにくさうでした。側に聞いてゐる妾は、それが齒掻いくてならなかつたのです。



「妾、ちつとも存じません。須美子さんは唯簡單に、さう云ひました。」

「でせう、先生も、あなたに聞いて、そんなことはないと思ひてゐるのですけれど、人と云ふものは氣の迷ひとか、魔がさすと云ふやうなこともたまにはありますからね。拾つたのでしたら、先生にお出しになれば、それで済むことなのですよ。」と云つて、先生は須美子さんの顔をちつと御覽になつてゐました。

どうして分つたのだか、扉の外には、お友達が一ぱいより添ふて耳を長くしてゐました。硝子戸の外側からも顔が澤山並んで覗いてゐました。「妾ちつとも存じません。」と須美子さんは前と同じ返事をいたしました。妾は、もう先生の生ぬるい紙間を聞いてゐられませんでした。

「あなた、幾らお隠しなすつても駄目よ、妾、ちやんと見てゐたのですもの、拾つた銀貨を紙に包んで、天神山の細道の、ほら棒抗のある處へ埋めて置いたでせう。」妾はとうとう面と向つて然う云つてしまひました。

須美子さんが、それに驚いて降か云はうとする處へ、御覧

生と云ふ男の先生が這入つて入らつしやいました。そして、事情を一寸藤井先生に聞かれました。

「あゝその銀貨なら僕が今朝早く拾ひましたよ。十銭が三枚と二十銭が二枚でせう。」と云ひながら、衣袋へ手を突込んで数枚の銀貨を掴み出されました。妾は飛び上る位びっくりいたしました。

三

「僕は今朝、花園の草取りをしようと思つて、誰よりも早く學校に來たのです。是れはあの天神山の處で拾つたのです。」と藤井先生は話しつゝけられました。

藤井先生のお顔は急に晴れやかになりました。そして直ぐ嚴格な表情に變つて行きました。

「一體どうしたと云ふのです。あなたは人の名譽を傷けるやうな出鱈目を云つたのですね。」と藤井先生が仰ると、皆の目が悉く妾に注がれてゐました。

「否、確かに見たのです。」妾は、やつとは云ひました。

「確かに見たと云つたつて。」と先生は茲で一寸笑はれて「銀貨は藤井先生が拾つて下さつたやありませんか。人に濡衣を

着せると云ふことは、此上もない悪いことですよ。先生はあなた方を愛してゐます。あなた方を信じてゐます。それに、どうして、良心に恥づるやうな行ひをなさるのでせうね。先生は斯う云ふ場合にいつも、自分自身を責められるのです。

生徒は先生と同じ心でなくてはならないのです。皆が列を正して前へ進んでゐても、その中の只一人が列と反對の方向に進まうとしてゐると考へて御覽なさい。その行進はやり直さなくてはならないでせう……いゝ加減なことを云ふものぢやありません。須美子さんにお詫びなさい。」

妾はどうしても合點が行きませんでした。妾が間違ひなく銀貨を落した場所、須美子さんが拾つてゐたのです。それを紙にくるんで、土に埋めたのまで見て來たのです。柳先生が拾つたと仰るのが、却つて怪しいのです。妾の疑ひはまだ須美子さんから離れません、それ故どうしても詫言氣にはなれません。すると突然、

「先生、とし枝さんが悪いのぢやないのです。妾が悪かつたのです。」と須美子さんが云ひました。

「妾が彼處へ紙包みを埋めたのが悪かつたのです。今朝妾が

天神山の細道まで参りますと、道の中央に硝子の片らが、澤山散らかつてゐたのです。其儘にしておくと誰か怪我をすると思つて、妾拾ひましたの。ですけれど拾てゐる場所がなかつたので、それを紙に包んで道の端に埋めたので御座います。それをとし枝さんが見てゐたのでせう。」

まあ妾の心に比較べて、須美子さんは何と云ふ美しい心の方なのでせう。妾は恥しくて、濟まなくて、先生や須美子さんの顔を、見ることも出来ませんでした。その硝子の片らは、昨夕轉んだ時に毀した化粧水の罐なのです。妾は何かお詫びの言葉を云はうとしました。けれど口に出ませんでした。

「須美子さん！」と藤井先生は椅子から立たれました。

先生と妾とは、何時の間にか、須美子さんの兩の手を執つてゐました。先生のお目からは、はらりと涙がはふり落ちてゐました。笑を含んだ須美子さんの瞳も、一ぱいの涙にう

るんでゐました。

「御免なさい、御免なさい」妾は斯う云はうとする言葉が、矢張涙の玉となつて、頬に散るのです。

ほんとに今思出しても恥しくて仕様がありません。(終)

おとこづき

楠山 正雄

五百人の王子



或國のお后が赤ん坊の代りに五百、卵を生みました。お后は恥づかしがつて、卵をのこらす河に流しました。隣の國の王がこれを拾ひ上げて持つてかへると、卵の中から五百人の王子が生まれました。この五百人が大きくなつて、先手の大將になり、知らずに自分の父母の國を攻めに來ました。けれどもお后は、ちつとも驚かず、この五百人はわたしの子供だから。といつて、お城の高樓の上に出て、寄手の五百人に口を開かせ、自分は胸を開けてお乳を押へると、乳はさつと進み出て、五百人の口に入りました。一滴もその外へはこぼれ出ませんでした。

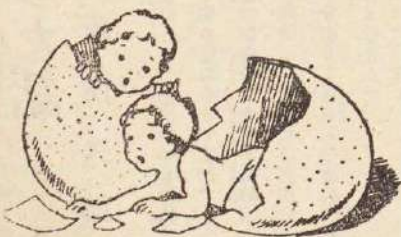
親子といふことが分かつて、敵は一時に槍を地に放り出しました。兩國は和睦しました。

恩をしる龜、恩をしらぬ人間

子供が龜を釣上げておもちやにしてゐました。そこへ或男が通りかゝつて、命乞をして放してやりました。龜が恩報じに、洪水のおこることを男に知らせてやりました。大きな舟に家財を積みおせ一家が水の上に浮ぶと、果たして大水が出て外の者はみんな流されました。その中で一人、男は舟につて大水の上を浮いて行くと、例の龜が出て來て舟にのせてくれといひました。次に龜が來ました。次に狐が來ました。みんなのせてやりました。最後に人間が來ました。人間は恩を知らない者だから。といつて、龜は止めましたが、男はさかずに舟にのせてやりました。

水が治まつてから、龜が恩返しに墓穴の中にかくしてある財寶を教へました。男はおかげでお金持ちになりました。すると、前に助けてやつた男が來て、財寶を山わけにしろといつてくれたで、思ふやうにならなと、おこつて王様に訴へました。男は捕へられてひどい目に逢はされました。龜と狐と蛇が相談して、狐が王様のお城の中で毎晩厭な聲を出してさわぐと、龜と蛇が王女の居間に這上がつて王女を驚かして、病氣にしてみました。

王様が心配して占ひを立てると、無實の罪人が牢に入つてゐる娘だといふので、しらべて牢に入つてゐる男を放免してやりました。恩を忘れた男は重い刑罰に逢ひました。



禿が王様になつた話

齋藤 佐次郎



しいことには、もう二十歳をとうに越してゐるのに、頭の毛が薄くて、まるでお爺さんのやうに見えました。で、村の人達はこの息子のことを「禿、禿」と呼びました。ところが、禿は大變に思ひ者で、母親がどんな職業を覚えさせようとしても、すぐと家へ歸つて来てしまひました。

「お母さんは私のいふ事が解らないのですか。これから直ぐと王様のところへ行つて、私がお姫様をお嫁にほしと言つて頼んで來さへすればいいのです。」

禿はちれつたやうにもう一度いひました。

「だけれど——だけれど、お前は自分で何をいつてゐるのか解つてゐないのだらう。」

とお母さんは、どもり／＼いひました。

「第一お前は、何にも職業を持つてゐないし、財産なんか一文だつてないし、おまけにお前のやうな禿に、何で王様がお姫様を下さるものかね、考へて御覽よ。」

「それは大きなお世話です。たゞ私のいふ通りにしてくれ、ばい、のです。」

禿はかういつて、夜晝母親をせめたので、たうとう母親もあきらめて、ある日のこと、一番上等の着物を着て、王様のお城へ行きました。

丁度その日は、王様が人民の訴へ事や不平をお聞きにならる日だったので、お母さんはわけなく王様のお目通りへ行く事が出来ました。お母さんは、ふるへながら申しあげました。

あるお天氣のいい夏の朝のこと、禿はいつもの通り自分の家——家といつてもまるで牛小屋のやうですが、その廣場に廻轉んでゐますと、王様のお姫様が女官を大勢つれて、馬に乗つてお通りになりました。

禿は大變やうに身體を半分起して見ると、きれいな／＼お姫様なのでびつくりしてしまひました。

この時から禿は、人間ががら／＼變つてしまつたのです。

「自分はお姫様をお嫁にもらふのだ。外の人は決してもらはないぞ。」禿は一人で決めてしまつて、とび起きて、お母さんを探しに行きました。

「お母さん、これから王様のところへ行つて私が是非お姫様をお嫁にほしと言つて來て下さい。」と、禿はいひました。

お母さんはきもをつぶして、息子が氣狂ひになつたのだと思つて、口もきけませんでした。

「王さま、どうぞ私を氣狂ひだと思召さすにお聞き下さいまし。實は私にはたつた一人の息子がありますが、いつぞやお姫様がお通りになつたのを——と目見てからは非自分のお嫁にほしいから、王さまにお願ひして來いといつて、夜晝私を責めるのでございます。それで私がそんな馬鹿氣たことをいふものでない、もし申しあげたら、それこそ私の首が無くなるという聞かせたのでございますが、少しも聞入れません。で、たうとう今日参りました。どうぞ私を御存分になすつて下さいまし。」

ところが、王様は變り者で、何でも並はずれた事が大好きでしたから、お姫様の話を大變面白くお聞きになりました。そこで普通の王様だつたら首を切るか、牢屋へぶち込んでしまふ處なのですが、そんなや／＼な事はしないで、たゞ「と言、」とお前の息子にあひたいからこゝへ來させなさい。」と、仰しやいました。

お母さんは思ひがけない王様のお言葉を聞いて、噓ぢやないかと思つて、ボカンとしてゐました。しかし、王様がもう一度同じことを仰しやつて、少しもお怒りになつた様子がないの

で、初めてホッと安心して、急いで家へ歸りました。

「お母さん、巧く行つたかい。」

母親が敷居をまたぐが早いか、禿がききました。

「お前にあひたいから、直ぐとお城へ来るようにと王様が仰しやつた。」と母親が話すと、禿は不思議なほどはれ々とした顔になつて、すぐさま出かけて行きました。

王様は禿を二と目御覧になつて、大變な奴を呼んでしまつたと後悔なさいました。早く遠ざけてしまはなければいけないと思ひになりましたが、自分で呼んだものですから、それには何か理窟をつけなければいけないので困り抜いて、

「お前は私の王女をお嫁にほしいそうだね。よろしい、結構だ。が、しかし、王女の夫になる者は先づ最初に世界中の鳥を集めて来て、このお城の花園へ持つて来なければいけない。」と仰しやいました。

禿は王様の言葉聞いて、がっかりしました。どうしたら世界中の鳥がつかまへられるでせう。たとへ、それが出来たにしても、お城へ持つて来るまでには幾年もくくかゝらなければなりません。しかし、そのまゝ黙つて引込んでしまふの

は口惜しいので、禿はお城を出ると、そこに廣い路があつたので、それをたゞ無暗にとこまでもく歩きました。

かうして一週間たちました。すると、砂漠へ出ました。樹は一本もなく、たゞ大きな岩がところ／＼に轉つてゐました。

その岩陰に一人の仙人が坐つてゐました。仙人は見なれない、不思議な男が行くのを見て呼びかけました。

「おい／＼、お前さんは大變心配な顔をしてゐるね。私に出来ることなら、力になつてあげるから話したらどうかね。」と仙人がいひました。

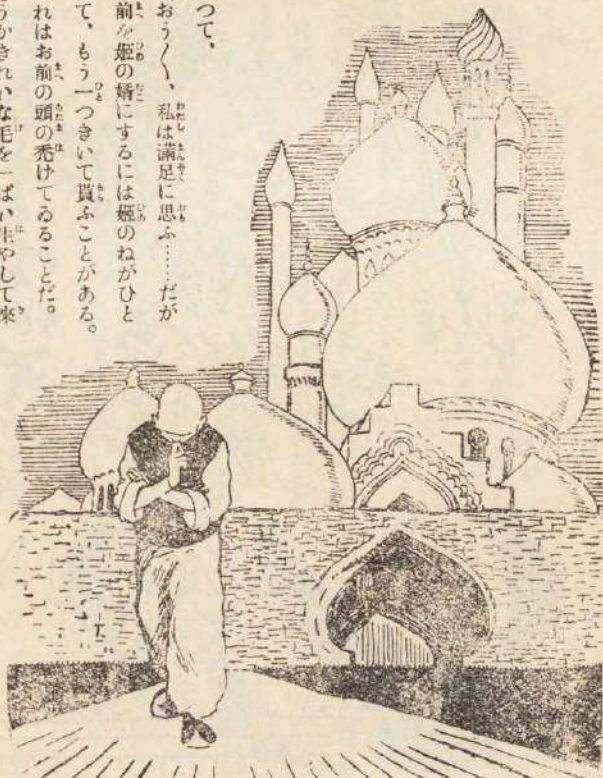
「おちさん、私は王様のお姫様をお嫁にもらひたいのだけれど、王様は世界中の鳥を捕つて来なければ、お嫁にしないと仰しやるのです。」かういつて禿が話すと、仙人は笑ひながら「それは何でもないことだ。これから二日の間行くと、太陽の沈む道筋にあたつて、柏の樹が澤山に生えてゐるから、その中で一番背の高い樹の下にちつと靜かに坐つてゐなさい。すると、程なく大變な羽ばたきの音が聞えて来る。それは世界中の鳥がそこへ来て枝に巢をつくるのだ。やがて靜かになるからその時を待つて、「マツツニシ」と一聲叫びなさい。

そうすると、鳥は樹にとまつたまゝ動けなくなつてしまふ。後は擲へることもお前さんの自由だ。」

禿は仙人にお禮をいつて、大喜びでその方向へ急ぎました。



幾日かたつてのこと、身體中羽でつまれた不思議な姿のものが王様の御前へやつて来ました。近づくに従つて、「バサッ／＼」と羽音が聞えました。それはいふまでもなく、禿が山の様に鳥を持つて来たのです。「王様、おいひつけの物を持つて参りましたから、お姫様を下さい。」かういつて禿が手を放すと、山のやうな鳥がバツと一度にとび立つて、王様の頭の上を舞つて、花園の方へとび去りました。王様はあはて／＼し



「おう、私は満足に思ふ……だが
お前の姫の婿にするには姫のねがひと
して、もう一つきいて貰ふことがある。
それはお前の頭の禿けてゐることだ。
どうかきれいな毛を一ぱい生やして來
てもらひたい。そうすれば、すぐにも姫の婿にするから。」と
うろたへながら仰しやりました。

毎日考へました。
すると、ある日のこと、王様は
お姫様を大金持ちの息子にやる約
束をなすつたといふ知らせを聞き
ました。禿は眞赤になつて怒つて、
お城へ忍んで行きました。
お城の大廣間では結婚式を挙げ
るところで、花嫁と花婿が大勢の
家來たちにかこまれて王様の出て
いらつしやるのを待つてゐる處で
した。禿は不意にとび出して行つ
て、
「マヅツユニ」と、一聲叫びま
した。
すると、そこにゐた者が一人残
らず石のやうになつて、そのまゝ根が生えたやうに動かなくなつてしまひました。禿はうれしそうにこそゝと柱の陰へ
かくれました。

王様は出て來て見るとこの有様なので、膽をつぶして、こ
れはてつきり悪者の仕業に違ひないと思ひになつて、呪を
とくことの出来る魔法使を呼びにおやりにになりました。

魔法使は王様からすつかりの話を聞いて、

「王様、それはあなたの方が間違つてゐます。もしあなたがは
じめの約束通りになさつたら、こんな事にはならなかつたで
せう。これはどうしても禿の青年にお姫様をおやりにならな
ければいけません。」と、申しあげました。

王様は大變つらくお思ひになりましたが、この魔法使のい
ふ事に間違ひのないのを知つてゐるので、止むなくあきらめ
て、その言葉に従つて禿を呼びにやりました。

柱の陰で聞いてゐた禿は、くす／＼笑つて急いで家へ歸つ
て母親にいひました。

「いまに王様からお使が來て、私を呼びに來るから、さうし
たら、私は幾日か前に旅に出たつきり歸らないといつて下さ
い。しかし、お母さんは貧乏なんだから、旅が出来るだけのお
金をもらへるのなら、探しに行つてもいい」とおひひなさ

そういひ置いて、禿は天井裏へかくれました。間もなく、
戸をドン／＼と、いて王様の家來が入つて來ました。

「禿の息子さんはゐますか。王様が御用があるのだから、ゐ
たら私と一しよにお城へ來て下さい。」

と、家來がいひました。

「まア、残念なことに、伴は四五日前に旅に出た切り歸つて
來ません。」

母親は教つた通りをいひました。

「何處へ行つてゐるのか知りませんが、王様がお姫様をやる
といつてゐらつしるのです。」

「あの千は決して行先を言つて行きませんが、しかし王様
のお呼びだといふのなら本當に有難いことです。何と
して探して参りませう。心あたりの處もありますが、貧乏で
すから、旅をするお金もありません。」

「金ならいくらでもあける。丁度こゝに千圓あるからこれを
持つて行きなさい。」

家來は千圓入つた金入れを禿のお母さんにくれました。
禿とお母さんとは、一週間の間家から外へ一歩も出ずに



やいました。

「王様、私はあなたが約束を守つて下さらなかつたので、ごつかりして、この國にゐるのがいやになり、世界中を巡り歩かうと出かけたのです。」

かういつて、禿は出たらめをいひました。

王様は改めて結婚式の支度をおいひつけになつて、禿をつれてお姫様のゐるお部屋へ行きました。大廣間の中は何もかもこの間のままで、お姫様も花婿も家来たちも、石のやうになつて突立つてゐました。

「お前さんに呪を解くことが出来るかね。」と、王様が仰しやつたので、禿は内心はどうかと心配しましたが、「出来ません」といつて、つか／＼と前へ進んで行つて、

「マヅチュンの呪！ なくなれ！」

と、叫びました。

すると、忽ち石のやうに立つてゐた人達は生返つて、もとの通りになりました。王様は大喜びで禿とお姫様の結婚式を挙げました。

禿はその後間もなくこの國の王様になつたそうです。へはり

りました。近所の人知れてもいけないと思つて、夜になつてもローソク一本ともしませんでした。

遂に、あるお天氣のいい朝、禿はやく起き立て一番上等の着物を着てお城へ行きました。

王様は大變お喜びになつて

「おう、よく來てくれた。今まで何處にゐたのだ。」と、仰し



五郎作と狐

三宅房子



ひかし、ある山奥に狐が住んでゐました。この狐は人を化かすことが上手で、どんな人でも化してさん／＼悪さをした上、しまひに頭を半分青坊主に刺つてしまひました。ですから村の人達は皆な怖がつて夕方からは決して山へ行かなくなつてしまひました。

ところが、村に五郎作といふ若者がゐました。なか／＼きかぬ氣の男でしたから、ある日のこと、村の若衆が大勢ゐる處へ來て、

「お前達は間拔けだから狐なんかに化かされるのだ。俺はこれから山へ行つて、狐を生捕つて來て見せてやる。」と、大偉張りて皆なが留めるのもきかずに、日の暮れ方、一人で山へ行きました。

五郎作が山道をどん／＼登つて行くと、途中に小さな沼がありました。

「はつは。こゝだな、村の連中が化かされてお湯だなんていゝ氣持ちに入るのは。」など、思ひながら五郎作がそこを通りすぎて、深い笹藪のところへかゝると、ガサ／＼と音がしたので、びつくりして其方を見ると、一匹の狐が出て來ました。

「畜生！ 出たな。」

五郎作はそういつて、にらみつけましたが、狐の方では一向お構ひなしで、チヨ／＼と五郎作の足もとを觸るやうに通つて、スタ／＼麓の方へ行きました。

その様子があんまり圖々しかつたので、五郎作はどぎ／＼を抜かれて掘へることも忘れてゐました。その内に狐の姿はだ



んん、見えなくなつて行くので、五郎作は初めてびつくりしたやうに、

「畜生！ 何處へ行く積りだらう！」といひながら、後をつきました。

狐は山道をトボ／＼歩いてゐましたが、途端に古草鞋が落ちてゐたのを見つけて、何にするつもりかそれを口にくはへました。

やがて、沼のある處まで来ると、狐は古草鞋を下に置いて、沼の水を一口二口飲んでゐたのをキコロ／＼見廻しました。五郎作は大きな杉の樹の陰にかくれて、狐のすることを一心に見つめてゐました。

「畜生！ 何かに化ける積りなんだな。ちやんと正體を見届

けてやるぞ！」

五郎作は目を皿のやうにして見てゐました。もう其の頃はあたりが暗くなつて、里の方の灯がチラ／＼またゝいてゐました。

狐はしばらくすると、どんより澄んだ沼の中へ一足踏みこんで、何かを切りと取つてゐました。よく見ると、沼の中に藻が一ぱい浮いてゐるので、それを集めてゐるのです。

やがて狐は、藻を澤山にとつたのでそれを頭につけたり、身體につけたりしてゐましたが、忽ち若い女に化けてしまひました。

「たうとう化けやがつたな。しかし、俺はすっかり見て知つてゐるのだから、化かそうつたつて化かされはしないぞ！」

五郎作は杉の樹のかげで、一人で力んでゐました。すると狐は今度は拾つた古草鞋を手に持つて、それへ藻をとつてはつけ、とつてはつけしました。妙な事をするなと思つて、ちつと見てゐると忽ちそれが可愛い赤ん坊になつてしまひました。

「オギャ／＼、オギャ／＼」

「ア／＼早くお上り」といつてゐます。

「お婆さん、あんまりしばらく来なかつたのね、今日は少し晚いけれど来たのよ。」

「そうかい、さア／＼此方へ来て、赤ちやんを見せておくれ。おや／＼まア太つて可愛くなつたね。」

戸の外で見てゐた五郎作はいよ／＼ちつとしてゐられなくなつて、

「畜生！ よくもあんなにいや／＼化してゐるな。古草鞋の赤ん坊が太つたもないもんだ。よし、飛込んで行つてびつくりさせてやらなくては。」



古草鞋の赤ん坊が泣出しました。その泣聲は人間の赤ん坊と少しも違ひません。五郎作がたまけて見てゐますと、化けた女は古草鞋の赤ん坊を抱いてお母さんらしく、

「おう／＼、可愛そうに／＼泣くんぢやないよ、おう／＼」といつて、切りとめすつて、だましました。おしまひには、子守唄まで歌ひました。

「坊やはよい子だ、ねんねしな……」

と、切りにいゝ聲で歌つてやつてゐます。やがて、赤ん坊はす／＼といゝ氣持ちに眠つてしまひましたから、若い女はホッとして安心したやうに子供を抱いて、また歩き出しました。五郎作は後をつけて行きました。

女は一軒の百姓家の前まで来ると立止つて、そつと戸を開けて、中へ入りました。

「畜生！ たうとう化しに入つたな、今にどうするか見ておれ！」五郎作はちつとしてゐられなくなつたので、駈けて行つて戸の隙間から中を覗くと、中では一人のお婆さんが産を織つてゐましたが、女が入つて来たので、

「おや／＼、誰かと思つたら花ちやんかえ、よく来たね、さ

五郎作は「御免なさい」といはずに、ガラ／＼と戸を開けて家の中へとびこみました。

圍爐裡の傍には一人のお爺さんが坐つてゐましたが、五郎作の入つて來たのを見て、

「もし／＼、あなたは誰だね、ついぞ見たことのない人だが、」とききました。

「私は五郎作といふ者だが、見兼ねたので飛込んで來たのです。」

「へエ、何か見兼ねたことでもあるのかね。」

「ある處ぢやない、お前さん達は狐に化かされやうとしてゐるんだ。」

爺さんはボカンとして、不思議さうな顔をしました。

「はア、ではお前さんが私を欺さうとでもいふのかね。」

「じやうだん言つちやいけな。私はお前さん達が化かされやうとしてゐるので、助けに來たのだ。」

「では、一體、誰が化かすのです。」

「驚いちゃいけないよ、それ、そこにゐる若い女の奴だ。」

五郎作がういつて、今にも飛びかゝりそうな様子をした

「どつちが狐だかわかるものか、馬鹿々々しい。」といつて、泣いてゐる孫娘をいたはりました。

しかし、五郎作はどうしても狐の正體を見破つてやらなくてはならないと思つたので、いきなり臺所へ行つて、其處にあつた出刃庖丁を持つて來ました。女は

「キャッ」

といつて逃げ出しました。爺さんはうろたへて、

「これッ、あぶない！馬鹿な眞似をするでない。」と叫んで、

五郎作の腕を押へつけました。

「離しなさい。俺はちやんとこの二つの眼で見たんだ。こん畜生！よくもうま／＼と欺したな。」

五郎作が爺さんを引離そうとすると、丁度足もとに赤ん坊が母親に置いて行かれてギヤ／＼泣いてゐるので、

「よし、丁度いゝ、この赤ん坊から先きに殺してやらう。こいつはもと／＼古草鞋なのだから、殺したつて血なんか出るものか。」

五郎作は爺さんの手を振りほどいて、いきなり赤ん坊をつかみ上げました。赤ん坊は火のついたやうに泣きました。

ので、爺さんは顔色を變へて、

「じよ、じようだんをいふにも程がある。化かされてゐるのはお前さんのことだ。眉毛につばでもつけて、もう一度正直して來なさい。こゝにゐるのは私の可愛い／＼孫娘なんだよ。いくら私が年をとつても、まだ自分の孫と狐と間違へるやうな／＼ろくはしない。」

爺さんが眞青になつて怒つたので、五郎作も或は爺さんのいふのが本當かとも思ひましたが、しかし、たしかに最初から狐が化けたのをちやんと見て知つてゐるので、

「まアお爺さん、そんなに怒らずに私の話を聞きなさい。」

といつて、はじめからの話をすつかりしました。

しかし、爺さんは少しも相手にしません。そこで、五郎作は決心して今度はそこに坐つてゐる女に向つて、

「やい、狐め、早く正體を見せろ。」と怒鳴つて、つかみかゝらうとしました。女は「わアッ」と泣出しました。爺さんも婆さんもい／＼怒出しました。

「手荒なことをして見なさい。承知しないから。爺さんは立上つて、五郎作に向つて來ました。婆さんも傍から、

「これ、早まつた事をするでない。お前さんが古草鞋だといふ赤ん坊が、聲をたてゝ泣いてゐるのが聞えないか。」

「ナニ、こいつははじめつから泣いてゐるんだ。畜生！古草鞋め！」

かういふが早いから、五郎作は赤ん坊の身體に出刃を突刺しました。すると、どうです。古草鞋だとばかり思つた赤ん坊の身體からバツと血が流れました。

「人殺しいッ……」

「誰か來てくれ……」

爺さんも婆さんも、若い女も氣狂ひのやうになつて、騒ぎ立てました。五郎作は血を見たので、

「しまつたッ！」

と叫んで、氣を失つたやうになつて、そこへ倒れてしまひました。

「たしかに狐が化けてゐるとばかり思つたのは大變な間違ひだつた。みんな自分の見そくなつたつた。赤ん坊ながらも人の命を取つたのだから、自分も生きてはゐられない。」

五郎作は眞青になつて、出刃庖丁を自分のお腹へ突刺そう

としました。すると、その時、
「トン／＼、トン／＼。」

と、外の戸をたたく者がありました。

「誰だ。誰だ。」爺さんがどなりました。五郎作も一寸氣拔けがして腹を切るのを止めて、そつちを見ました。

戸を開けて入つて来たのは、一人の年老つたお坊さんでした。

「皆さん、御めんなさい。私は夜の山道を歩いて、丁度この前を通り合せたところ、大變な叫び聲がするので、何かと思つて来たのです。」

お坊さんはそういつて、家の中を見廻しました。

爺さんは泣きながらすつかりの話をして、

「どうぞ、この仇を討つて下さい。」といひました。

「私は決して悪い氣があつていたのでありません。てつきり



狐が化かしてゐるとばかり思つたので、とんでもない事をしてしまひました。腹を切つてこの申譯をいたします。」五郎作はふるへながらあやまりました。

「まあ、そんな早まつた事をしてはいけません。ついでには赤ん坊のお母さんはじめ、お爺さん、お婆さん、あなたの方のお心の中もお察しするが、このところはどうぞ私に任せてくれませんか。」

とお坊さんがいひました。爺さんも婆さんも孫娘も、お坊さんのいふ事なので承知しました。

「それでは、罪ほろほしに今日からこの若者は私の弟子にします。それで皆さんもどうか勘忍してやつて下さい。」

お坊さんはそういつてから、今度は五郎作に向つて、

「お前さんは過失とはいへ、一人を殺したのだから當り前な

夜風が急にひや／＼と身體にしみ返りました。

五郎作はふるふるとふるえて、

「お、寒い！」と思はすいつてヒョイと後を見ました。

すると、今まで立つてゐたお坊さんがありません。

おや／＼と思つて、向よく見ると、お爺さんもお婆さんも、若い女もありません。百姓家もありません。

五郎作はたつた一人、山のてつべんにちよこなんと坐つてゐるのです。

びつくりして頭をなで、見ると、毛が一本もありませんでした。(をばり)



ら申譯に死ななければならぬ。處だが、私が見たからにはそうもさせられない。

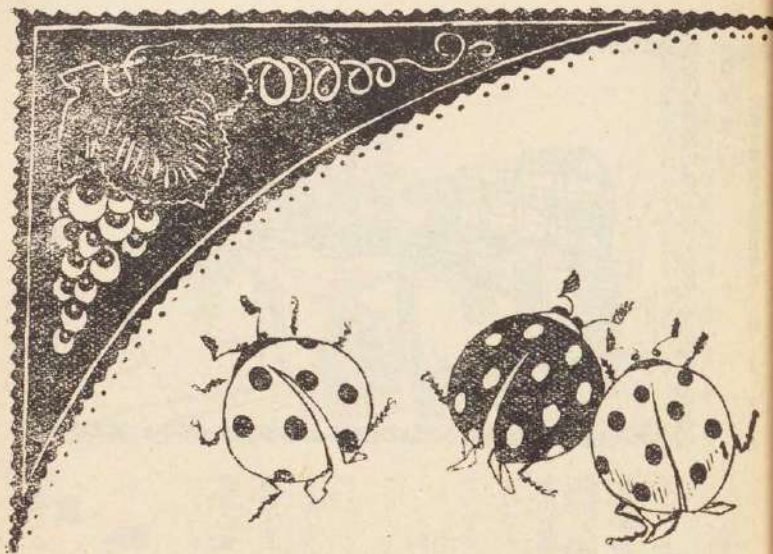
お前さんは今日から私の弟子となり、今すぐにこの場で髪を落して、佛様の道には入り、殺した赤ん坊の後生を弔つてやらなければいけません。」

と命令するやうにいひました。

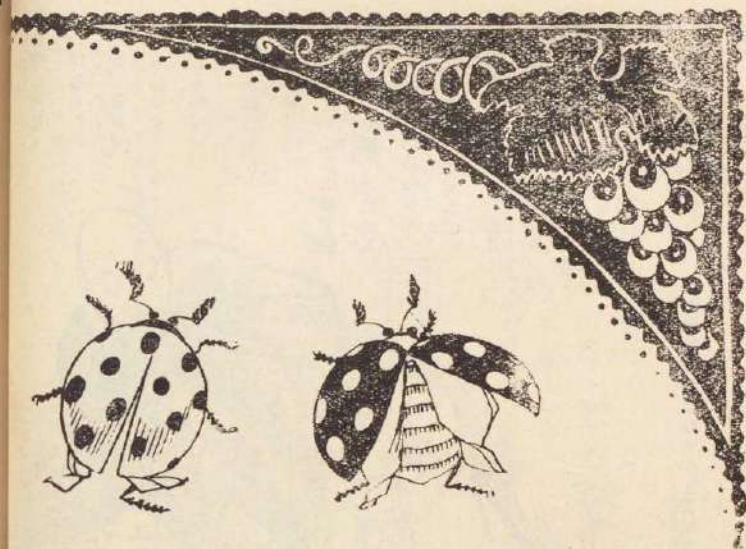
五郎作は命が助つたので、大喜びで、すぐその場でお坊さんに髪を剃つて下さいと頼みした。

お坊さんは剃刀を出して、五郎作の頭をくり／＼と背坊主に

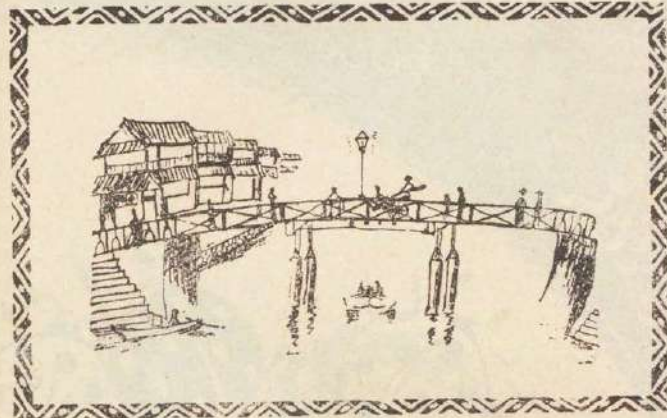
にしてしまひました。



七星てんとう虫
 ひるねはするな
 おまへと同じキモノ着た
 てんとう虫だましに
 だまされる



七星てんとう虫
 若山喜志子
 赤い さらさのキモノ着て
 ぶどうの葉かけは涼しかろ



自由畫「橋」

大阪府藤井寺市藤井寺町 村上芳雄

童謡 野口雨情選

野原の風

東京芳香信愛

野原の風は
薄の上に

さらさらだ

どこから どこまで

さらさらだ

雨降り

群馬青柳花明

お山は淋し
雨降りだ
田圃も淋し
雨降りだ

雀の子等は
かはいそだ

もちつき

東京武田多喜子

七八

梅のお家はもちつき

ボトン／＼とおもちつき

しづかな／＼おもちつき

おもち貰ひにまわりませう

ダンス

瓜哇三上よしを

ゴシ／＼ザク／＼

お米とき

ザク／＼ゴシ／＼

お米のダンス

雀

東京後藤静子

銀のやうな雨が
降つてる中を

チュウ／＼雀

死んぢやつた子供を

さがして飼いた

自由畫「樹」

長野縣伊那小學校第四 牧田新助



公孫樹

朝鮮押村貞子

父さま 公孫樹

母さま 公孫樹

お宮の庭に 順々にならんで

青い芽を出した

青い芽を出した

お祭

福島佐藤貞吾

お祭提灯 紅提灯

大い提灯

見て来たか

わーわッと見て来たか

學者

大阪水谷久萬子

學者より

金文字開いて

山さん暗いよ

鸚鵡

神奈川石川榮男

片言まじりて鸚鵡さん

坊つちゃん

嬢つちゃん

お早う お早う

月

福山廣井千代子

東の森から

丸い 丸い 月が出た

今晩は

今晩は

あんま

秋田能登澄子

七九

(知つ妹)



「妹の私」 畫由自
子美富越小 六等校學小川春道原江鮮朝

あんまといんぴと
ビイビヨロ
とんぴは天上で
ビイビヨロ
あんまは地べたで
ビイビヨロ

からす

千葉 秋野 揚花

山猫

東京 伊藤 正雄

からす かあ〜
あつちゆけ
曇つた お天氣
霽れてくれ

山猫

四十雀

廣島 寺岡 賢一

八〇
あんまり寢坊でしくちつて
仲間はずれに
されちやつた。

董

愛知 栗本 はるを

お庭の鉢の花董
小さくゆれた
大きくゆれた
見てたらゆれた。

蛙の唄

新潟 藤野 春江

裏の田市の田の中で
コロロ ココロと鳴く蛙
廣い田市の田の中も
月のよい夜となりました

おとうさんお留守
お母さんお留守
お留守の中に
金の卵なくなつた
銀の卵なくなつた

子守唄

東京 中村 喜久夫

坊やいい子よ ねんねしな
あしたお家へ来る客は
それはお伽の王女さま
もしも坊やが寝ぬならば
あしたお家へ来る客は
それは魔法のお婆さん

寝のお道

長野 藤 綱宗 義

寢の御殿へ行く道に
おときばなしが
二つと
密柑が三つと落ちてゐた

電話

東京 宮崎 金三郎

急に電話が
口きいた

チリン チリン

モシ〜と
口きいた

春夜

大阪 前川 ひとみ

ほのかな春の夜
お月さま
かささして
遠い山の寺の
鐘つき堂の上にゐた



「鉢」 畫由自
市松殿古町普崎觀市關下



幼山年詩
若山牧水選

種蒔き(賞)

福井縣高濱 濱田久雄
小學校高二

今頃は種蒔きで
あちらこちらと
種蒔きをはじめてゐる。

評、なんといふ静かな景色でせう、そして
何といふ静かなこの歌でせう。(牧水)

僕の家(賞)

滋賀縣愛知郡柳
村小學校尋四 西川久彌

僕の家はみんなで七人
それでもよそへ二人いつてゐるから
家にゐるのは五人でござる
五人でもやはりさびしいござる。
評、さびしくともなかくすればよくござ
る。(牧水)

船のいかり

愛媛縣温泉 黒田正忠
郡生石富久

船のいかりが
ぎいぎいと泣いてゐる。
評、短けれどよくそのこゝろもちがいで
ゐる。(牧水)

水くみ

福井縣高濱 澤田貞三
小學校高二

藪のかげの井戸で
水をくんだ時に
着物がぬれて
こまつた。

評、正直な、さつぱりした、私の大好きな
歌です。(牧水)

ツクシンボ

下野國日光町 金谷セツ子
金谷ホタル子

オハカマハイデ ウレシガリマス
カハイノネ ツクシンボサン
アタマガデコボコデハ シヤウガナイ
評、デモ、コノアタマカナクデハハレモツ
クシンボダトオモヒマセン。(牧水)

綴方

編輯部選

夜の街(賞)

福井縣高濱 松本せい
小學校高二

「さあみんな行こか」と私と母は立ち上
つてには下りた。そして、そこに立て
てあつた傘を取つて外に出た。よく見る
と外には細い雨、雨が止度もなく降つて
居て、道の所々には小さな水たまりがあ
る。半町程先の方にある四つ辻の電燈の
光はこちら迄も薄く照して居る。庭のあ
んずの木は葉がこんもりと茂み合つて何
となく氣味が悪い。

ばつと傘を廣げて其の雨の中をすた
すたと歩き出した。しほしほと細かい雨
なので傘にあたつて居るのが分らない位
である。丁度隣の家の前まで来た時、後
の方でブウ／＼と自動車のラッパが鳴つ
た。私と母は前方に分れた。それ以後は

を、かけられるで、」と言ひながら私はさ
して居た傘を手早く地上につけて前を防
いだ。自動車はけたたましく其の前を通
り過ぎた。私と母は又一緒になつた。し
ばらくは二人とも何を話さなく無言で
歩いて居た。

二、三町来るとかちやの前へ来た。硝子
越に眞赤になつた金物を主人と弟子が向
ひ合つて代る／＼トンテンカン、トンテ
ンカンと一心にきたへて居るのが見え
る。「あれーや暑い仕事やわい」と此の
時始めて母が言はれた。私は其の時何か
他の事を考へて居たので、直ぐそれに返
事する事が出来ず、たゞ「うん」と言
つたきりであつた。其の内又二人の對話
はぶつたり切れて、一しきり雨の夜道を
急いだ。そして何時の間に四つ辻へ來
て居た。

「赤尾町の方から行こか」と母の聲に私
は又驚いた。そして少しあはて氣味が早
口に「はい、赤尾町のかい」といふやうに

と今度はこれだけいつた。山間の自轉車
店には誰も人は居らず、明るい電燈が
つくねんと淋しさうに所々にはつてある
繪や隅の方にある自轉車に光を投げて居
る。

間もなく赤尾町へ出た。家々の門燈で
道は大變明るい。私と母の影は長くうつ
てゐる。ある店等は低く下げた電燈の下
に一人の年老いたばあさんが何かしてゐ
て、奥の方からは赤ん坊のしきりに泣く
のが聞える。

赤尾町も過ぎて本町との間の石橋まで
來た。警察や郵便局の門燈がゆるやかに
流れる川の水にうつて何とも言ひぬ美
しい。橋の上の二つの電燈の一つは川の
水にうつて居るし、一つは直ぐ横の柳の
木を照して居る。雨を受けた柳は強い光
を受けて葉末々々のしづくがきら／＼と
光つて美しい。少し行くと一匹の犬が軒
下のごみ溜をしきりにさがして居る。カ
フェの前を誰かが傘をさして通つた。後

に何處かの犬がワン／＼／＼とほへ
て居る。知らぬ間に本町を通り過ぎて三
門へ差かゝつた。多くの門燈が雨にぬれ
た往來を明るく照らしてゐる。丸津の運
送店では人が忙がしさに家の中をあち
こちしてゐる。少し行つた西村の運送店
では馬が五六匹、あちらにもこちらにも
居る。降る雨にびつしよりとぬれた馬は
明るい電燈の下に淋しさうに立つてゐ
る。みのを着た人達が何人も／＼家の中
や外をあたふたと歩いてゐる。

思ひ出(賞)

東京市元町 中坂石次郎
小學校尋六

長さんはやさしい叔父さんで、夜にな
ると僕や弟に田野村の田野平といふ面白
い話をたくさんして下さつた。僕は夜に
なるのを楽しみにして、夜になるかなら
ないうちに叔父さんの室へ入つてまつた
が常であつた。

叔父さんは正月の三日頃から流行性感

かけどり

滋賀縣稻村 山田久次郎
小學校尋四

かけどりにゆけば
がちやくといふ金
おちるくと思ふ僕
評、大丈夫です、ちひさなかわいいかけ
とりさん。(牧水)

ねずみ

東京市金町 渡邊勢子
小學校尋五

天井の上ですんでゐる
ねずみの話を聞いてゐれば
たべもの取りに行く話
評、オヤ、用心しなさい勢子さん。
(牧水)

かばん

千葉縣山武郡 村井初枝
東金小學校五女

かたにさけられてる
かばんさん
大そう氣らくですな
評、さうでもありません。(牧水)

はなさし

福島縣二本松 宗形サタ
第一小學校尋四

けうしつに
はなさしがあつても
はながない

評、何でもい様だが、たゞの人にはこの
さびしさがありません。(牧水)

あひる

廣島縣東村 寺岡俺夫
小學校尋五

白いあひるは大きな黄色い
しやくしのやうなくちばしで
どちやうを一匹はりだした。

つばめ

東京高等師範 安藤猛
附屬小學校尋三

きのふ生れたつばめが
すの中でびい／＼鳴いてゐた。

白帆

宮城縣石巻 齋藤悟
小學校高一

あれ／＼白帆がほつちり一つ

冒といふおそろしいかげにかゝつた。最初はそんなにひどくはなかつたが、日まに重くなつていしやもだいが首をかしけるやうになつて来た。それだに叔母さんは深田工場へ遊びに行つたり、パン屋へ遊びに行つたりして、すこしの間も叔父さんのかんぴやうもせず毎日遊んで居た。叔父さんは時々「石ちゃん、家のくそたれやらうはどこへ行きましかしつて居ますか」とたづねる。僕は「さつきパン屋とか深田工場とか行きました。」といふと、叔父さんは「ほんとにやらうはしやうのないやつですよ。人が病氣でくるしんで居るのに、毎日大きいくせしやがつて、によき／＼とあそんでいやがつてしやうのないやらうだ。病がなほつたらいなかへやつてしまひますよ。早く病がなほればよいが」といつていきをはすませるのが常であつた。

七草も過ぎて今日は正月の十六日、地獄のかまも休といふ日である。僕が學校

からかへつて玄關へ入らうとすると、すだれがかかつて居て、すだれのまん中のへんに忌中と書いた紙がはつてあつた。僕はそれを見るとはつとした。家の中で叔母さんの泣く聲が聞える。玄關の戸をあけて中へ入らうとすると、お客様、下駄がいつばいならべてあつて下駄をぬぐ場所がない。しかたなしに臺所へまはつて臺所から家へ入つた。家の中はおせん香の香がただようて居た。ただ今」といつたが誰もへんじをしない。ただ叔母さんの泣く聲が聞えるばかり。いつもなら「ただ今」といへば、叔母は「おかへり」といふのに今日にかぎつて誰も返事をしない。いそいそではかまをたたみ、かばんをかけて叔父さんの室へ来て見ると、叔父さんの顔に手ぬぐいがかぶせてあつて二度と叔父さんの顔を見る事が出来なかつた。

ふろ

福島縣二本松 野地弘子
第一小學校尋五

此間の夕方に養蠶部の大谷さんが「今うごいてゐた。」

田こぎりの半日

神奈川縣村岡 林善梓
小學校高二

日はふろをたてるからはひりに來な」と言つた。私と若ちゃんといふちやんとみいこちやんと子供どうしではひつた。はだかになつたばかりには寒くて上の齒と下の齒と合はさりあつてゐたが、湯の中へはひるともうそれははりたいに、あつすぎるくらいだ。はじめは皆もすましこんで口をむすんでだまつてゐたが、若ちゃんがかくせを出してきはぎ出した。あらふのがいやだと見えて、「みんなでいもあらひをしませう」と言つた。私も丁度あらひたくなかつたから大さんせい。皆いから、みの口切つて水をほすとよい。」して、うしろをむき背中を合せてこゑを母の居る下で少しこぎつた。其の位にした。力を入れてしたつちやんが背中がいたくなつたと見えてやめた。それで皆もとまつてしまつた。そこでうしろをむいて見るとそこにはあかがういてゐたので、皆は「きたない／＼」といつてあがをたべながら。

みの口からは、大變な勢で流出てゐる

しづかに走るお海の中を

敷

高知縣安藝郡佐喜濱村 岩 田 毅

うちのざしきは廣いなア
青い壁がしいてある。
向ふの方には白帆も見える。
うちのざしきは廣いなア

つゝじ

美城縣眞壁郡 吉川 たみ
若柳校尋五

大きな／＼つゝじの木
からだ大きく花さかす
ばあかな／＼つゝじの木。

二人の大王

美城縣眞壁郡 篠崎 まつ江
若柳校尋六

二人の大王がそろつて行く
たばこをふかありすいながら
すつた人が一間も行つても
のこつたけむはとんで居る。

天龍峽

美城縣眞壁郡 新井 四郎

天龍峽ハウツクシイ
アチラニ岩コチラニ岩
岩ノ間ニ橋ガアル。

妹の手紙

愛知縣宮田 栗 本 寛一
小學校尋六

オウトハチ、ニダカレテネマス
と一年生の妹の手紙に書いて來ました
がてうさん

東京市外淀 日向 ナナ
橋町字柏木

ダワツグワツ グワツ
なぜなくのがてうさん
おまえのお羽がビツチヨリよ
なみだでせう

あたしのおやつはんぶん上げる
おだまりなさいね。

には鳥

高知縣安藝郡佐喜濱村 佐藤 營三

／＼けつ／＼けつ／＼けつ／＼けつ
一番鳥から二番鳥
三番鳥が／＼とふ頃
雨が／＼と降つてきた。

八六
が中々へらない。ゴーツと汽車の来る毎
に誰か知つて居る人が乗つてはるまいか
と思つて、見るけれども知つてゐる人ら
しい者は乗つて居ない。たゞ知らない人
が大勢、顔を赤くしてのつてゐるばか
り。そうこうしてゐるうちに水が少しへ
つたので、又田へ入つた。春ではあるが
朝で水は非常に冷い。鎌を握つて、前へ
なけるようにして、スプーツと土の中に
入れ、又ぐいとひいて後へ起す。投げ入
れたとたんに、水がビシヤンと身體中に
はねる。其の度に目や口に土水が入る。
終には鎌が落ちない内に目をつぶつてしま
ふ。『もう何作こぎつたらう。』と後を見れ
ば、思つたよりこぎつてない。『チエツ……
随分面倒臭いなあ。』と思ふとあきてく
る。なるべく午前中にやつてしまはふと
思ふと休んでもおられぬので又初める。
初めは来る汽車毎に見送つたが、一生懸
命でこぎると汽車の来るのも聞えないや
うだ。又後を見たらあゝ、もう半分位
うだ。

おこくさん

美城縣眞壁郡 瑞 章
若柳校尋六

僕の家の中で、ボチリ／＼と木をおつ
て居たおとくさんが、母のはたをる音を
聞いて、僕の家を通つた。

おとくさん『機織け『母』うん』おとく
さん『も、しき』母も、しきと云ふわけ
もないのよ』おとくさん『今年水が出た
から不景氣で、おらも、しきも、貧乏で
何にも織れぬ。』チヨコ／＼とわからない
に云つた。『どれ、母へつ見ていんかな
うだ。』

大工さん

宮城縣牡鹿郡 齋藤 さつ子
石巻町浜田町

私の家は今ふしんのさい中です。私の
家をたてて居る大工さんは大森かめ吉と
言ふ人です。弟子は、二人居て一人は大
橋義松と言ふ名で一人は、伊藤金さうと
言ひます。そして三人はよく働いてくれ
ますから、時々お母さんがお菓子やお茶
を出しますが、食べません。食へても一
つか二つです。私が此の事をお母さんに
はなしますと、お母さんはにらみます。

試験の時間

龜岡區中六番 井 關 正
町五番地

私の先生はしまのひとへ物と、むらさ
きぢの小菊のぬひがはいつてゐる着物
をおめしになつてゐます。はかまは茶色
の本毛をはき、髪は今はやりのはいか
らに前をわつてよこへすこしよこたはし
て、大きなとめのをたくさんさし、し
つかりとめておられます。くわつばつな
きで、くわぎよう時間には、あせをしほ
り／＼いつしよけんめいにおしへてくだ
さいます。



通信

こんどは悪い

山本 鼎

こんどは悪いのがないので、やつと四枚だけあげました。
つとつとをよこして下さい。

童謡の選後

野口 雨情

童謡は「子供にもわかりよく、同時に、大人にもわかりよく、同時に、子供の心であること」をわすれてはいけません。つまり、子供にも大人にも共感のものでなければいけません。子供を本位にしたり、大人を本位にしたり、一方へかたよりすぎると、いい童謡といふことが出来ません。いい童謡を作らうと思ふかたは、

幼年詩を選びつゝ

若山 牧水

同じ学校から澤山によこされる所がある。其處の先生に同好の人があること、心強く思はれる。またさういふ所に限つて出来も住い。然し誌上に發表する際にはなるべく投書金帯を普適的なしめたい必要から、一つの学校のばかりを採ることに躊躇せねばならぬ。場合の多いのを憐む。今度なども若狭高濱小から来た中には殆んど優秀の差のつけられぬ位によい出来たのが揃つてゐたが(こゝに茂山義雄君の「石投げ」柴田勤三君の「大掃除」などが秀れてゐた)みな掲載を見合はせねばならなかつた。これはどうか先生や生徒諸君に諒解を願つて、誌上に出る由ねに拘らず益々勉強して頂くことにしたいものだ。子供がよめるものゝ私は好きだ。この地

こんどの綴方

選者

年時などよませさうな子供をよませせぬために作らねるといふ様な氣持で私は選に當つてゐる。のび／＼と、そして清らかに育つてゆく、そのための子供の歌だと思つてゐる。よせて、あげて、せむし見ないになつてゐる子供を見るのは誠に悲惨だ。

童話選評

選者

今月は大量賞募集の佳作童話が澤山残つてゐるので、例月の選は次號に廻して、その方を掲載することにしました。高井宮氏の「お別れの先生の話」アンダーセンの作品を見るやうなやさしい氣品のある作で、新聞紙と花菱の話を讀んでゐながら涙ぐまされた程感動を與へられました。この話が少年少女にどんな印象を與へるかを思ふ時、この作の尊さが感ぜられます。

大塚つね子さんの「烏とふくらふ」はすつと前に掲載するつもりが、紙面の都合上延びてゐたので、自由畫や幼年詩に見るやうな大人にみられない、すなほな、面白い處が出てゐるのを見るべきです。加藤さんの「昔いお爺さんと悪い虎の話」になると、い／＼子供でなくては書けない面白味が出てゐま

▲懸賞童話選外佳作(つゞき) 蒲英公(松本正樹)お土産(柳澤ひろし)紫の煙(中島光樹)沼の水(柳枝くちぶえ)阿波十五郎(泰姫様)黒川一美(魔術の失敗(柳澤孝次郎)法師小僧(植田定雄)黄金の鳥(桃井尚文)貴い涙(鈴木多三)武者人形合戦(久保田公平)裁判ごっこ(若見清三)桃のお家(佐藤夢卿)黄金の鳥(桃井尚文)紅梅と少年(南郷太郎)お祖母さん(若山達洋)クラ・トニー(山本正)なくした種(藤本俊子)二つの心(藤井秀雄)学校ごっこ(中島實)學校(大橋實)猫の様な女子代子(山本康市)獅子の王(佐藤秋水)蛙の京参り(荒川浩二)睡魔病(若松博)古狐(石橋岩藏)惹き寄せさん(西村一郎)三人の娘(熊田峰崎)忠義な大(東郷實俊)友を尋ねて(秦泰美)編まれた産婆(酒井郷山)轉び地蔵(森田克己)お姫様の魂(寺岡賢一)孫の出世飯(飯田嘉一郎)日本太郎(三上良一)白い馬(塚本健治)不思議の密(坂本福江)善人と馬鹿(相馬恒夫)忠義な心よ(茂本三郎)平和の國(本多勇魚)感心な姉弟(廣井千代子)鯛とふぐ(佐生幸)雨乞ひ様(北原次郎吉良)永田章彦(玉の導き)花々木吉三(山寺の娘)鈴木一誠(闇の子供(井深清見)袖振若(藤井秀夫)百合の花粉(長野泰美)幸福な王(小寺壽一郎)狐の思返(伊藤祥子)惹深婆と泥棒(椎木ミツ)家中の親類(藤村俊子)不思議な椅子(土橋力)天ぐや町(田中卯吉)タの彫像(海老澤春花)れむり屋(田中卯吉)龍退治(阿野一郎)馬鹿息子(山口佳津子)月の現(林自傳)龍(龍田義孝)

▲懸賞童話選外佳作(つゞき) 無類(大島十八)チャリィ(山崎英治)春とたんぼ(宮崎金三郎)風(及川繁作)戦争(田中治郎)赤い日(井上八郎)鈴鹿(名和青泥)満月(若田来三郎)人形(山路鶴治)編織と養(柳枝山)入道(花房妙子)まっ夜(田中卯吉)はげ山(若原勝見)子供の望み(池谷としな)紅い花(小山水紅)どんなく(稻垣ひろし)水車(佐生幸)はげ頭(渡邊光)風(平井白洋)通る(米山九藏)桃が咲いた(都山、えて) ▲自由畫佳作 △電車(大坂吉田正五郎)△門(東京松原武子)△ままこと(愛媛黒田正忠)△家と樹(千葉長竹勲子)△鴨(大坂吉田正五郎)△風景(長野藤木清)△林檎(宮城八木信一郎)△土瓶(鐵賀山崎興嗣夫)△みみたの娘(廣島山中英三)△井戸端(福井松本喜造)△床の間にだるま(宮城藤隆信)△もも太郎(東京佐藤晴夫)△風景(長野藤木清)△汽車(福島慶晴)△叔父の所の食(京都川端三郎)△大學生の像(青森對馬千代一)△公園(福島三森康一)△人物(東京柴田俊子)△風景(高知北村壽男)△富士山(富山堀部芳瑞)△貝殻(長野上島良雄)△野球(神奈川渡邊和四男) ▲幼年詩佳作 △外(福井松山カノ)△星(東京井關正)△つゞき(東京鈴木一誠)△パンペ草(日光金谷三郎)△石投げ(福井茂山義雄)△大掃除(福井柴田勤三)△鬼ノ子(愛知岡崎サタ子)△コックリサン(東京杉山さき)△ひばり(神奈川池田菊次郎)△朝顔(福島今里ササ)△雪の日(京都田和子之助)△三本大根(高知阿野田治)△雨あがり(山梨土橋都子)

讀者だより

▲まあ金の船の詩的だこと編輯局の先生に私
ほんとうに感謝致してなします。そんな大き
なものが笑はれてもどうしても愛読せずには
おられませんの、これからどん／＼投書し
ますからどうかお尋下さい(演名 月見草)

しまぎれに右のやうなことを書きましたがど
うかごらんねがひます。どうしてどうし
てだいいの金の船がやめられませう。私は
いつまでもいづれでも金の船と別れること
はできません(福島 佐藤貞吉)

△どちらが上手(不明山本博士)△お月様(山
梨澤寺正)△雨(福島藤次郎)△火(高知
栄子)△鯉のぼり(横濱品川信次郎)△つとめ
(東京小原三郎)△海(神奈川志村エミ子)△
んば(長野宮崎俊郎)△私のよめいり(東京松
原武子)△雨ふり(大坂久米正一郎)△おてん
とさん(英城久保義正)△雲(英城齊木進)△た
んば(三重西澤幸子)△ひこうき(英城赤
雲和夫)△お山(愛媛秋山乙女)△キエロイ
(東京川田ユキ子)△釜(長野城田良秋)△風(横
濱阿部克次)△富士山(神奈川丸山文三郎)△
時計(東京橋本トキ子)△数(愛媛村上清貴子)

九〇

▲岡本先生、今日學校からかへつて見ました
ら待ちわびてゐた金の船が私の机の上におい
てあつた時、私はとび上つてよろこびました
あの表紙や口輪の可愛いこと、思はずはす
りなしてしまひましたわ。ほんとうに岡本先
生のお書方と言ひ、はい合のよいのは私にび
つくりしてしまひました。なほ来月にはもつ
ともつと可愛いのお書き下さいませ。さよ
なら。(そへじまえい)

▲僕も「金の船」の讀者です。僕は自由畫が
大好きで、こないだ一つ發りました。どうか
選に入れて下さい。(滋賀 中井二郎)

△金、の船、友。○北海道佐藤二君○山形大
山小源次君○長野市川カ子君○東京徳田龍
子君○千葉鈴木みづ子君○東京三上善之助君
○北海道聖園小学校○兵庫後藤三君○鹿兒
島東小園文雄君○北海道新田武藏君○愛知大
竹亮寛君○愛知小澤寛君○愛知尾關彌會市
君○京都小林長君○静岡石丸知子君○神戸二
瓶正子君○長野柳澤とし子君○東京木村純久
君○東京土屋博光君○埼玉松本秋三君○北海
道大橋榮藏君○愛知笠山崎三君○大阪藤崎義
一君○東京山野忠徳君○東京和賀藤義
京古川芳露君○鹿兒島中島與志正君○東京清
水八重子君○松山加藤正文君○東京山賀武雄
君○米澤山岸孝二君○大阪白江好郎君○東京
日岡桃子君○横濱水榮吉君○北海道佐藤久
志君○北海道古守善夫君○大阪佐藤忠君○兵
庫片岡長四郎君○青森野馬子君○長野高橋
史志君○大阪田中一夫君○愛媛藤崎キ子君
○秋田木島友次郎君○熊本宮崎九郎君○京都
河野征二君○東京安田節子君○岡山小橋智子
君○大分島良男君○東京ベリヤン會○三重
横山きみ子君○山形清水義雄君○大阪木田公
三君○山梨茂手木月江君○静岡土屋重君○
新潟羽賀泰三君○北海道野實義君○福岡高
階道子君○廣島石井克己君○神奈川服部正吉
君○長野細田つと子君○東京齋藤誠一君○長
崎竹中武重君○長野松田ますな君○長野堀内
泰雄君○東京本阿彌君○東京鈴木秀男君
○福島遠藤久男君○千葉大島ウノ君○大阪
山田美恵子君(以下次號)

新しく出た本

◆十五夜お月さん(野口雨情先生著)——待ち
暮した童話集が岡本一先生の装幀に飾られ
てい／＼出ました。「金の船」に出た先生の
作は勿論、その外先生の名作はすべての中
に集められてゐます。この頃出来た童話集中
これ程日本の子供に親しみあるものは外にな
いといつて差支へないでせう。本居先生の名
作曲が澤山に入つて、實に美しい、それで
て安価な本です。少年少女は無論の事童話研
究者には是非おすゝめします。(四六判一六四頁
神田南神保町尙文堂發行 定價壹圓貳拾錢)

日本傳説童話の中で滑稽が、つた面白いもの
ばかりを集めたものです。西洋物ばかり多い
時にかういふ本がど／＼出るのはうれし
事です。(四六判二一五頁 神田駿河國氏書
院發行 定價壹圓貳拾錢)

◆輕い王女(矢口龍氏譯 原作はスコットラ
ンFのもので、美しい王女や勇しい王子や湖水
の魔や鬼女などのでくるほんとうに面白い
物語です。その他、美しい乙女と怪しい歌し
話の、三人の王子の話だの、いゝものば
かりです。譯者は早稲田大學教授として名を
ある人ですから、文章はいふ迄もなく立派な
ものです。(四六判二一五頁 定價一圓三十錢
東京市牛込區津久土町六精華書院發行)

◆「金」の船(長田秀雄氏著)——既に本誌で紹介
いたしましたより大變な評判です。(四六判
二二六頁 定價一圓七十錢 東京市京橋區南
紺屋町 實業の日本社發行)

◆「金」の船の讀者です。僕は自由畫が
大好きで、こないだ一つ發りました。どうか
選に入れて下さい。(滋賀 中井二郎)

九一

懸賞創作募集

◆少年少女の創作◆

自由画……………山本 鼎先生選
 幼年詩……………若山牧水先生選
 綴方……………編輯部選

〔意注〕課題は何でもかまいません。諸君の日々見たり、感じたりすることから、諸君の好きなものを諸君の好きなように書なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は学校や学年(または住所と年齢)とおとまないうらにしてください。用紙は自由書ばなるたけ黄用紙に、幼年詩や綴方はなるたけ原稿用紙(または半紙)にかいてください。よく出来た方には『金の船』特製の賞品を差上げます。次號締切は七月三十日、發表は九月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地『金の船』編輯所。

◆一般讀者の創作◆

童話……………編輯部選
 話……………野口雨情先生選
 童謡……………編輯部選

〔意注〕童話は二十字詰二百行以内、童謡は二十行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づつ賞金として呈します。締切發表宛名は少年少女の創作と同じです。

定價 壹冊 參拾錢 送料 壹錢
 三ヶ月分 三冊 (送料共) 九拾錢
 半年分 六冊 (送料共) 壹圓八拾錢
 壹ケ年分 十二冊 (送料共) 參圓六拾錢
 但し新年號四月號九月號は特別號で廿五錢です。御注文の時は特別號だけ必ず一冊五錢づつ加へてお拂込み下さい。振替口座東京〇五七貳番

〔意注〕送金に振替が一等便利で御座います。御注文は必ず前金で御拂込み下さい。送金に振替が一等便利で御座います。御注文は必ず前金で御拂込み下さい。送金に振替が一等便利で御座います。御注文は必ず前金で御拂込み下さい。

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十年 七月六日印刷 納本(毎月一回)
 大正十年 八月一日發行 行(一日發行)
 編輯 齊藤 佐次郎
 發行人 齊藤 佐次郎
 印刷 東京市小石川大橋町八百八十八番地 光吉
 印刷 東京市小石川大橋町八百八十八番地 光吉
 印刷 東京市小石川大橋町八百八十八番地 光吉
 發行所 東京市麴町區飯田町六丁目二五
 キンノツノ社
 電話九段貳七五貳番
 東京市外田端三百五十一番地
 編輯部 『金の船』編輯所
 電話小石川五番八七

△沖野岩三郎先生著(母と子文庫第二篇)

森の祈り

最新刊 四六版二六〇頁表紙口繪麗美 定價金壹圓五拾錢送料金八錢

この長篇物語をあまねく百萬の家庭に推薦す

最新刊 四六版二百餘頁表紙口繪麗美 定價金壹圓參拾錢送料金八錢

黄金の星

△福田正夫先生著(母と子文庫第三篇)

鈴木善太郎先生著

第一篇

たんぽぽの家

忽再版 定價金壹圓三十錢 送料金 八錢

たまらなく心の美しい千勢子といふ少女が、その持つて生れた純美の行爲で幾多の人々を光明へ導くといふ長篇物語。

『母と子文庫』(全十二卷)

は、童話よりは些しく高級な少年少女長篇讀物です。どんなにいゝ内容であるかは次々に出來ます本を御覽下さい。

毎月一冊宛刊行、御申込になれば全十二巻の内容解説を進呈致します。

東京市小石川區 文庫社 電話九段貳七五貳番
 東京市外田端三百五十一番地
 編輯部 『金の船』編輯所
 電話小石川五番八七

東京市小石川區 文庫社 電話九段貳七五貳番
 東京市外田端三百五十一番地
 編輯部 『金の船』編輯所
 電話小石川五番八七

本誌顧問

西川 勉
中山 晋平
野口 雨情
山村 暮鳥
藤森 秀夫
西條 八十
北原 白秋
三木 露風
弘田 龍太郎
本居 長世
(イロハ順)

第四號内容(七月一日發行)

表紙 鳥の手紙
曲譜 隣村の狐
童謡 日本書紀の童謡
研究 子供の日の欲しい
感想

初山 滋
西條 八世十曲歌
本居 長世
野口 雨情
西川 辰夫
中條 夫

童謡研究
月刊雜誌

とんぼ

刊創月四

定價 一部三十五錢
菊版 總六號
會員證付割引其他種
種の特典と便宜とあり

論文 狩野 鐘太郎
社員童謡、會員童謡、自由詩、地方童謡、批評、
童謡一覽表、其他記事満載

創作童謡、童謡に關する論文及び感想文を歓迎す。會員規定は返
信料を添へ發行所宛に御申込次第送呈す

發行所 本日
社 ぼんと會 童謡本
地 番三町舟區谷市京東
〇 五 一 四 四 座口替振

吉屋信子作

▲▲菊半截純白布製二百六十頁
▲美本定價壹圓參拾錢稅六錢

花物語

新刊發賣第三集出づ!!!

第三集新に生れぬ、純白に金箔とて釣鐘等を描ける
表紙の氣品ありて收むる物語七篇皆とり／＼に悲しく
美しきローマンス!一つの花に一つの物語一つの玉に
一つの銘を彫る如く想ひは優しき堅牢の絃の鳴る音に
譬ふべく筆はゆかしき春の夜の月に奏する銀笛の悲し
き曲にさも似たり。

花物語

▼第一集九版 定價一、五〇
▼第二集七版 定價一、五〇

あはれ夕月の如く仄に悲しく朝の露の／＼とく優なく優し白日の夢の如く
悲しく美しきは花物語! 嗚!花よ少女などかくばかり深く共に
悲しく美しきぞ!

吉屋
信子
著作

▼地の果まで (長編小説) 定價三、〇〇
▼屋根裏の二處女(同) 定價二、五〇
▼野薔薇の約束(童話) 定價一、四〇

沼田笠峰著

▼菊半截四百頁布製美本
▼定價壹圓七拾錢稅六錢

女學校時代

新刊

女學校時代は最も美しい情感のあらはれる時で
す。花のやうな少女の、晴れやかな眼とやさし
い心とに、どんなに麗しい思が宿つてあることぞ。この書
は、その多感な少女の心をさながらに描いて、それに對する感想
と教訓とを加へたものであります。心の美を發揮しようと望むも
の胸にある惱を和らげて慰安を得ようとする少女は先づこの書を
讀いて御覽なさい。

沼田
笠峰
著作

わかし行くべき道(六版) 定價一、八〇
わかし結婚と自覺(三版) 定價一、六〇
わかし思想生活(新版) 定價二、三〇

▼吉屋信子著 赤い夢(三版) 定價一、〇〇
▼上澤謙二著 物語集(全八冊) 各價一、八〇
▼山村暮鳥著 ちるちるみちる 定價一、九〇
▼嘉悦孝子著 怒るな働け 定價一、八〇

目録往復呈
呈進書業

東京市東區
市口座
町二〇
集區九
廿番一
地番四

元兌發

生田春月氏編
日本民謡集

■日本に始めて現はれた民
■謡全集藝術的價值高き
■理想的の民謡全集苟
■も日本の民謡を知らんと
■せば此一冊にて充分也

菊半號活字二段四頁餘

定價一圓五十錢 送料八錢

渡邊農學士著
林檎の落る音

■六十餘篇の面白い科
■學の話を満載せる小供
■の読み物文部省より認
■定されたる最も新時代
■に適應せる小供の本

四版三百頁上美本

定價一圓三十三錢 送料八錢

金の輪 第三卷 附録

やまの 山六爺さん

沖野岩三郎

四

お芝居は無事に済みました。座長の山六爺さん初め、一座のものは、みんな、面白かった、ああ面白かったと言ひながら、めいめいのお家へ歸りました。

ところが、山六爺さんのお家には、「黒」が居ませんでした。鹿も猪も狼も、みんな何所かへ出て行つたと見え、影も形も見えませんでした。で、爺さんと婆アさんとは、齒のない口をつばめて、ひゆうひゆう、ひゆうひゆう、ひゆうと口笛を吹きながら、湖水の周圍を二度も三度も巡りましたが、ワシともウーとも云ひませんでした。

「今晚中には歸りますよ。表戸を開けて置いてやりませう。」

婆アさんはさう言つて、表戸を開けたまゝ、休んでしまひました。

翌る朝眼を覺して見ましたが、やッぱり「黒」も鹿も猪も狼も歸つてありませんでした。

そこで山六爺さんは、動物學の大家である筑前の守ち右衛門の所へ行つて、「黒」や狼は何所へ行つ

振替東京一五九四番
電話九一段一三九番

東中 京猿 神樂 町 越 山 堂

たのであるかといふ事を尋ねて見ました。
筑前の守は暫く考へてゐたが、

「黒」は此所から二里ばかり東の方の、小高い山の上に居ます、屹度居ます。」と申しました。で、爺さんは早速婆アさんと二人で、東の方へ野原を横ぎつて走つて行きました。

丁度二里ばかり歩いたと思ふと、山の上から何だか知らないが、ワンワン、ギャンギャンと、いろいろな鳥や獣の鳴聲が聞えて來ました。

「爺さん爺さん大變ですよ。何でもこれは「黒」と狼とが喧嘩を、おッはじめたに違ひない。早く行つて引分けてやりませうよ。」

婆アさんは泣聲を出して斯う言ひました。

「まさか、そんな内輪喧嘩をするやうな、馬鹿な「黒」や狼ぢやありません。これは屹度歐洲戦争よりも、もつと大きな戦争が起つたに相違ない。」と云つて、爺さんは心配さうに山の上の方を見てゐましたが、婆アさんの耳もとへ口を寄せて、

「婆アさん、静かにお歩き！ あすこの木、あの大きな櫻の樹の蔭から、そうツと見ませう。ひよつとすると、「黒」も狼も猪も鹿もみんな厄事事件のやうに殺されて居るかも知れないよ。」と申しました。

婆アさんは、もうがつがつと、顔へながら、

「よア、爺さんどうしませう。どうしませう？」と言つて其の袖に縋りました。

爺さんも、つい、婆アさんと一緒に泣きました。

「爺さん、お葬式をしてやりませうよ。」

「うん、さうともさうとも、若し死んでゐたなら……」

「ねえ、若し死んでゐたなら……けれども達者でゐたなら、又た可愛がつてやりませうネ。」

「うん、さうともさうとも、達者でゐたなら可愛がつてやらう。」

二人は草原を靜かに靜かに櫻の樹の所まで這ひ上つて行きました。そして爺さんがひよいと、腰を伸して見ますと、まア、何といふ事でせう。廣ツ場の正面の小高い所に、「黒」が前足をちやんと據へて、こちらを向いて立つて居るぢやありませんか。

「居る居る！ 活きて居る！」と爺さんは思はず大聲で言ひました。

「まア活きてゐるのネ、あア、嬉しい！」と婆アさんも、右の握り拳で腰のあたりを敲きながら言ひました。けれども「黒」は、知らぬ顔で廣ツ場の方を睨んでゐました。

「どうしたのだらう？」と思つて廣ツ場の所を見ますと、右の方の端に白や斑や灰色の猫が三十疋ばかり、ずらりと並んで、前足を前方へ思ひきり伸して、今にも駆け出さうと構へて居ました。

「爺さん爺さん、御覽なさい。あの猫は何をして居るんでせう？」と婆アさんが言ひました時、爺さんは、

「婆アさん、あれを御覽！ あの猫の左側に、ずらりと並んで居るのは兎のやうですよ。」と申しました。

年をとつた爲に、眼の遠くなつた爺さん婆アさんは、肩をしかめて能く能く見ますと、まア何といふ事でせう！猫が三十疋と兎が三十疋と、行儀よく並んで、今から競争をしようとしてゐるぢやありませんか。猫は今にも駆け出したいやうに、身體を揺りながら前の方を一所懸命に見詰めてゐます。兎は長い耳をピン！と立て、硝子のやうな眼玉を見張つてゐます。

「どうするんでせう？」と、爺さんの言つた言葉の終らないうちに、高い所に坐つてゐた「黒」が、「ワン、ワンワン！」と三聲吠えますと、三十疋づつの猫と兎とは、矢のやうに前の方へ駆け出し、白や黒や灰色が、穂を轉すやうに、入交つて走つてゐると、俄に左の方の草原から、五六十羽の雄子と山鳥とが、美しい美しい羽を擴げて低く飛びながら、ケン、ケンケンケンと鳴き出しました。それはどうやら兎の味方らしいのです。すると左の方の森の中から、何百といふ鳥が、ガアガアガアと鳴きながら猫の味方になつて其の應援をし初めました。遙か向ふの大きなお寺の屋根では、可愛らしい鳩が、勝負や如何にと、熱心に其の競争を眺めてゐました。

廣い廣い野原を猫と兎とは、必死になつて駆け抜けましたが、大きな樫の樹の一本聳えてゐる所まで来た時、其所を横ぎつて流れてゐる小さい溝を一疋の白兎がびよん！と跳び越えたと思ふと、樫の樹に宿つて居た眞白い鶏が、コケツ、コツコと鳴きました。すると雄子も山鳥もみんな嬉しうに飛び廻りました。兎の群はみんな、びよんびよんと、面白さうに嬉しうに踊つてゐました。

猫は口惜しうに、眼を細くしてみんなすこすこと離つて來ました。喧し屋の鳥もびつたり黙つて

「こいつは、面白い。我々のお芝居よりもこれの方が面白いや。」と爺さんは感心したやうに言ひました。「我々がお芝居の稽古をして居る間に、「黒」も負けぬ氣でこんな事をやつたのですネ。」と婆アさんも心から感嘆してゐました。

競争は三回續きました。第二回も同じく、兎の勝利でしたが、第三回目には、其の決勝點の溝の中へ、一疋の兎が後足を踏外して、周章で這上る間に一疋の眞黒い猫が、背の向ふへ、びよんと跳び越えました。

すると樫の樹の上に居た、尾の長い眞黒い鶏が、コケツコツコと大きな聲で鳴きました。猫が勝つたといふので、さア鳥の一群は大騒ぎで、あつちの森からも、こつちの山からも、近所に居た鳥共が、みんな集まつて來て、カアカアと鳴き立てました。

猫は猫で、背を單峰駝のやうに高く聳えさせて、威嚴を示すのもあれば、兎に對して、これ見よがしに、樫の樹に這上つて、其の枝にぶら下つたり、くるくると上手に宙返りをしながら地面へ落ちたりしました。

雄子も山鳥も、白い鶏もみんな黙つてゐました。

兎もすこすこと、「黒」の前にもどつて來て、芝生の上に寝ころんでゐました。

爺さんと婆アさんとは、こんな面白い競走を自分達一人だけに見るのは勿體ないと思つたので、早速湖水の側の新しい村へ行つて、千六百人の人達を呼んで來ようと思つて、すたこらと走つて歸りましたが、さて、新しい村には千六百人は愚か、子供一人も居ないのです。

「どうしたのだらう。みんな何所へ行つたのだらう？」と思つて、あちこちを見廻してみると、遙か向ふの森の所を一人の若い男が、さつさと西の方へ走つてゐるので、

「おうい、おうい、珍らしい競争があるよ。日本一の面白い競争があるよ。早く来て御覽なさい……」と爺さんは聲を囁^{ささ}らして呼びました。すると其の若い男は、後を振り返つて、二人の方に手招きをしながら、

「早くいらつしやい。大芝居だ。世界一の大芝居だ。早くいらつしやい。」と申しました。

「大芝居だつて？ 世界一の大芝居だつて？ そいつは見逃すわけに行かない……」

爺さんは、腰を屈めながら駆出しましたので、婆アさんも後から、

「もしもし校長さん、山六學校の校長さん、そんなに生徒を、一人ぼつちにしてはいけません。私のお手々を引っぱつて下さい。私だつて山六學校の生徒ですもの……」と甘へるやうに申しました。

爺さんは、婆アさんが、自分を校長さんだと云つたのが、餘り可笑しかつたので、思はず、ははははと笑ひました。(つゞく)

シヨカナと供子の本日



君はどつちがいゝ

どつちもほしい

それでは困る

ヂャンケンしよう

ヂャンケンボン

ヂャンケンボン

何べんやつても

勝負がつかぬ

それちやみんなで

いつしよに見よう

□誌 雑 繪 い し 美 の き 向 女 幼 年 幼 □

||||| 行發社ノツノンキ段九京東 |||||



大正八年十月十六日
(第三卷附録可也)
大正十年七月六日印
大正十年八月一日發行(毎月一回一日發行)

東京 キンノツノ社 發行

暑中休暇になりました

休暇中は、勉強も必要ですがそれより身体を丈夫にするが第一

三越はまた増築を致しまして、日本一の便利な店となりました、即ち暑中用の着物や運動具や海水浴や御旅行に必要な品が、残らず取揃へて御座います、お買物は三越に限ります

……お子供衆の御入用品は今度三越に移りました、また運動具部を四階に新設致しボールもバットもミットもその他種々あります

東京

三越呉服店